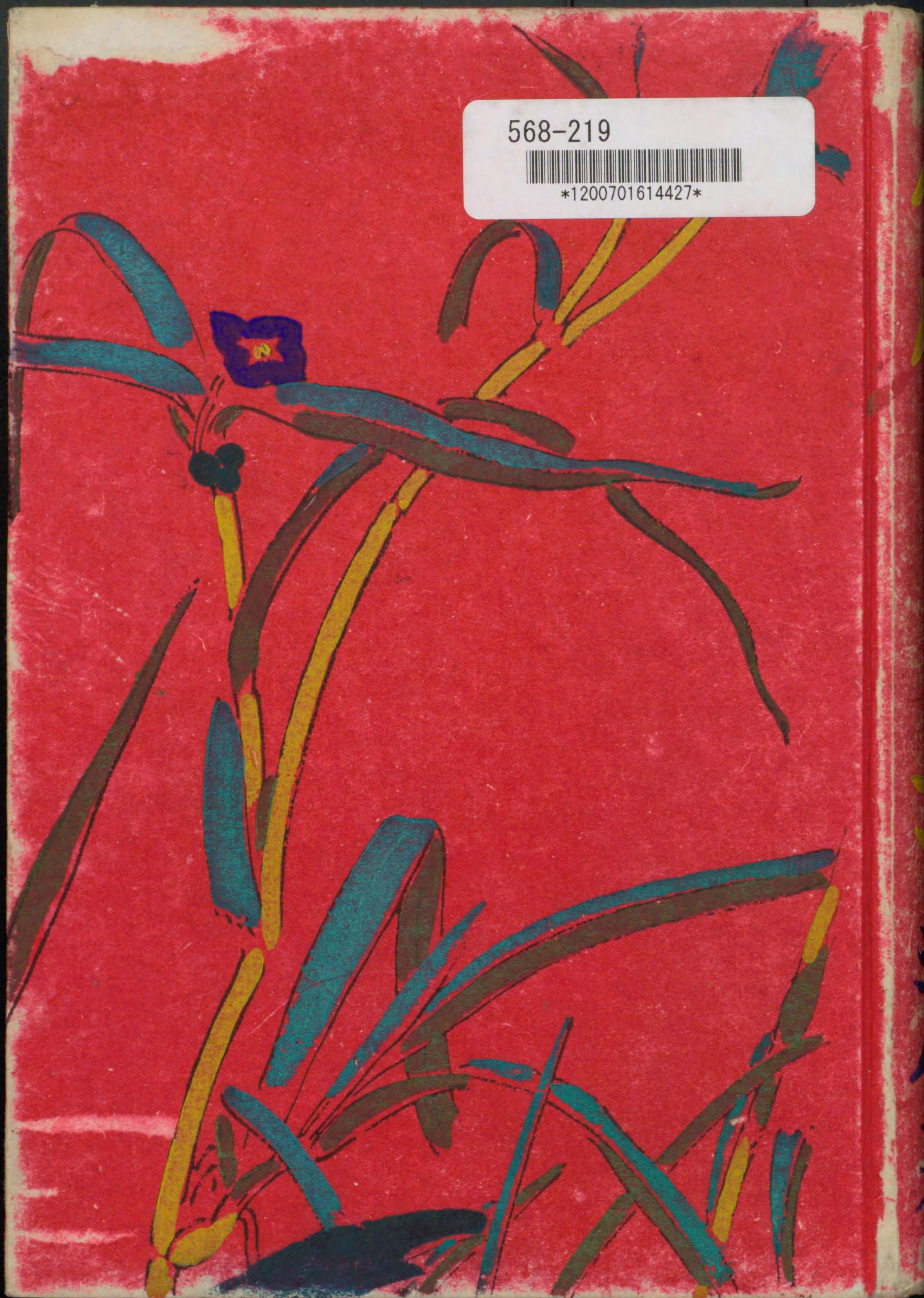


568-219



1200701614427





朱儒の言葉

文藝春秋社

朱
伊 雲
の
言
葉

文藝春秋社版

芥川龍之介の言葉

芥川龍之介著

侏儒の言葉

東京文藝春秋社版

568

219

東京文藝春秋社

芥川龍之介の

「侏儒の言葉」の序



I種
W



「侏儒の言葉」の序

「侏儒の言葉」は必しもわたしの思想を傳へるものではない。唯わたしの思想の變化を時々窺はせるのに過ぎぬものである。一本の草よりも一すぢの蔓草つるくさ——しかもその蔓草は幾すぢも蔓を伸ばしてゐるかも知れない。

芥川龍之介

侏儒の言葉

起一頁

澄江堂雜記

起一四九頁

病中雜記

起一五七頁

追憶

起一六五頁

文藝的な、餘りに文藝的な

起二〇七頁

侏儒の言葉

芥川龍之介作

小穴隆一畫

星

太陽の下に新しきことなしとは古人の道破した言葉である。しかし新しいことのないのは獨り太陽の下ばかりではない。

天文學者の説によれば、ヘラクレス星群を發した光は我我の地球へ達するのに三萬六千年を要するさうである。が、ヘラクレス星群と雖も、永久に輝いてゐることは出來ない。何時か一度は冷灰のやうに、美しい光を失つてしまふ。のみならず死は何處へ行つても常に生を孕んでゐる。光を失つたヘラクレス星群も無邊の天をさまよふ内に、都合の好い機會を得さへすれば、一團の星雲と變化するであらう。さうすれば又新しい星は續々と其處に生まれるのである。

宇宙の大に比べれば、太陽も一點の燐火に過ぎない。況や我我の地球をやである。しかし遠い宇宙の極、銀河のほとりに起つてゐることも、實はこの泥團の上に起つてゐることと變りはない。生死は運動の方則のもとに、絶えず循環してゐるのである。さう云ふことを考へると、天上に散在する無数の星にも多少の同情を禁じ得ない。いや、明滅する星の光は我我と同じ感情を表はしてゐるやうにも思はれるのである。この點でも詩人は何ものよりも先に高々と眞理をうたひ上げた。

眞砂なす數なき星のその中に吾に向ひて光る星あり

しかし星も我我のやうに流轉を閲すると云ふことは——兔に角退屈でないことはあるまい。

鼻

クレオパトラの鼻が曲つてゐたとすれば、世界の歴史はその爲に一變してゐたかも知れないとは名高いパスカルの警句である。しかし戀人と云ふものは滅多に實相を見るものではない。いや、我我の自己欺瞞は一たび戀愛に陥つたが最後、最も完全に行はれるのである。

アントニイもさう云ふ例に洩れず、クレオパトラの鼻が曲つてゐたとすれば、努めてそれを見まいとしたであらう。又見ずにはゐられない場合もその短所を補ふべき何か他の長所を探したであらう。何か他の長所と云へば、天下に我我の戀人位、無數の長所を具へた女性は一人もゐないのに相違ない。アントニイもきつと我我同様、クレオパトラの眼とか唇とかに、あり餘る償

ひを見出したであらう。その上又例の「彼女の心」！ 實際我我の愛する女性は古往今來飽き飽きする程、素ばらしい心の持ち主である。のみならず彼女の服裝とか、或は彼女の財産とか、或は又彼女の社會的地位とか、——それも長所にならないことはない。更に甚しい場合を挙げれば、以前或名士に愛されたと云ふ事實乃至風評さへ、長所の一つに數へられるのである。しかもあのクレオパトラは豪奢と神祕とに充ち満ちたエヂプトの最後の女王ではないか？ 香の煙の立ち昇る中に、冠の珠玉でも光らせながら、蓮の花か何か弄んでゐれば、多少の鼻の曲りなどは何人の眼にも觸れなかつたであらう。況やアントニイの眼をやである。

かう云ふ我我の自己欺瞞はひとり戀愛に限つたことではない。我我は多少の相違さへ除けば、大抵我我の欲するままに、いろいろ實相を塗り變へてゐ

る。たとへば齒科醫の看板にしても、それが我我の眼にはひるのは看板の存在そのものよりも、看板のあることを欲する心、——牽いては我我の齒痛ではないか？ 勿論我我の齒痛などは世界の歴史には没交渉であらう。しかしかう云ふ自己欺瞞は民心を知りたがる政治家にも、敵状を知りたがる軍人にも、或は又財況を知りたがる實業家にも同じやうにきつと起るのである。わたしはこれを修正すべき理智の存在を否みはしない。同時に又百般の人事を統べる「偶然」の存在も認めるものである。が、あらゆる熱情は理性の存在を忘れ易い。「偶然」は云はば神意である。すると我我の自己欺瞞は世界の歴史を左右すべき、最も永久な力かも知れない。

つまり二千餘年の歴史は眇たる一クレオパトラの鼻の如何に依つたのではない。寧ろ地上に遍満した我我の愚昧に依つたのである。晒ふべき、——し

かし壯嚴な我我の愚昧に依つたのである。

修身

× 道德は便宜の異名である。「左側通行」と似たものである。

× 道德の與へたる恩惠は時間と努力との節約である。道德の與へる損害は完全なる良心の麻痺である。

× 妄に道德に反するものは經濟の念に乏しいものである。妄に道德に屈するものは臆病ものか怠けものである。

我我を支配する道德は資本主義に毒された封建時代の道德である。我我は殆ど損害の外に、何の恩恵にも浴してゐない。

×

强者は道德を蹂躪するであらう。弱者は又道德に愛撫されるであらう。道德の迫害を受けるものは常に強弱の中間者である。

×

道德は常に古着である。

×

良心は我我の口髭のやうに年齢と共に生ずるものではない。我我は良心を得る爲にも若干の訓練を要するのである。

一國民の九割強は一生良心を持たぬものである。

×

我我の悲劇は年少の爲、或は訓練の足りない爲、まだ良心を捉へ得ぬ前に、破廉恥漢の非難を受けることである。

我我の喜劇は年少の爲、或は訓練の足りない爲、破廉恥漢の非難を受けた後に、やつと良心を捉へることである。

×

良心とは嚴肅なる趣味である。

×

良心は道德を造るかも知れぬ。しかし道德は未だ嘗て、良心の良の字も造

つたことはない。

x

良心もあらゆる趣味のやうに、病的なる愛好者を持つてゐる。さう云ふ愛好者は十中八九、聰明なる貴族か富豪かである。

好 悪

わたしは古い酒を愛するやうに、古い快樂説を愛するものである。我我の行爲を決するものは善でもなければ悪でもない。唯我我の好悪である。或は我我の快不快である。さうとしかわたしには考へられない。

ではなせ我我は極寒の天にも、將に溺れんとする幼兒を見る時、進んで水に入るのであるか？ 救ふことを快とするからである。では水に入る不快を

避け、幼兒を救ふ快を取るのは何の尺度に依つたのであらう？ より大きい快を選んだのである。しかし肉體的快不快と精神的快不快とは同一の尺度に依らぬ筈である。いや、この二つの快不快は全然相容れぬものではない。寧ろ鹹水と淡水とのやうに、一つに融け合つてゐるものである。現に精神的教養を受けない京阪邊の紳士諸君はすつぽんの汁を啜つた後、鰻を菜に飯を食ふさへ、無上の快に數へてゐるではないか？ 且又水や寒氣などにも肉體的享樂の存することは寒中水泳の示すところである。なほこの間の消息を疑ふものはマンヒズムの場合を考へるが好い。あの呪ふべきマンヒズムはかう云ふ肉體的快不快の外見上の倒錯に常習的傾向の加はつたものである。わたしは信ずるところによれば、或は柱頭の苦行を喜び、或は火裏の殉教を愛した基督教の聖人たちは大抵マンヒズムに罹つてゐたらしい。

我我の行爲を決するものは昔の希臘人の云つた通り、好悪の外にないのである。我我は人生の泉から、最大の味を汲み取らねばならぬ。『パリサイの徒の如く、悲しき面もちをなすこと勿れ。』耶蘇さへ既にさう云つたではないか。賢人とは畢竟荊蕀の路にも、薔薇の花を咲かせるもののである。

侏儒の祈り

わたしはこの綵衣を纏ひ、この筋斗の戯を獻じ、この太平を楽しんであれば不足のない侏儒でございます。どうかわたしの願ひをおこなへ下さいまし。どうか一粒の米すらない程、貧乏にして下さいますな。どうか又熊掌にさへ飽き足りる程、富裕にもして下さいますな。

どうか採桑の農婦すら嫌ふやうにして下さいますな。どうか又後宮の麗人

さへ愛するやうにもして下さいますな。

どうか菽麥すら辨せぬ程、愚昧にして下さいますな。どうか又雲氣さへ察する程、聰明にもして下さいますな。

とりわけどうか勇ましい英雄にして下さいますな。わたしは現に時とする、攀ち難い峯の頂を窮め、越え難い海の浪を渡り——云はば不可能を可能にする夢を見ることがございます。さう云ふ夢を見てゐる時程、空恐しいこととはございません。わたしは龍と闘ふやうに、この夢と闘ふのに苦しんで居ります。どうか英雄とならぬやうに——英雄の志を起さぬやうに力のないわたしをお守り下さいまし。

わたしはこの春酒に酔ひ、この金縷の歌を誦し、この好日を喜んであれば不足のない侏儒でございます。

自由意志と宿命と

兎に角宿命を信ずれば、罪惡なるものの存在しない爲に懲罰と云ふ意味も失はれるから、罪人に對する我我の態度は寛大になるのに相違ない。同時に又自由意志を信ずれば責任の觀念を生ずる爲に、良心の麻痺を免れるから、我我自身に對する我我の態度は嚴肅になるのに相違ない。ではいづれに従はうとするのか？

わたしは恬然と答へたい。半ばは自由意志を信じ、半ばは宿命を信すべきである。或は半ばは自由意志を疑ひ、半ばは宿命を疑ふべきである。なせと云へば我我は我我に負はされた宿命により、我我の妻を娶つたではないか？同時に又我我は我我に恵まれた自由意志により、必ずしも妻の注文通り、羽

織や帶を買つてやらぬではないか？

自由意志と宿命とに關らず、神と惡魔、美と醜、勇敢と怯懦、理性と信仰、——その他あらゆる天秤の兩端にはかう云ふ態度をとるべきである。古人はこの態度を中庸と呼んだ。中庸とは英吉利語の good sense である。わたしの信ずるところによれば、グッドセンスを待たない限り、如何なる幸福も得ることは出来ない。もしそれでも得られるとすれば、炎天に炭火を擁したり、大寒に團扇を揮つたりする瘦せ我慢の幸福ばかりである。

小兒

軍人は小兒に近いものである。英雄らしい身振を喜んだり、所謂光榮を好んだりするのは今更此處に云ふ必要はない。機械的訓練を貴んだり、動物的

勇氣を重んじたりするのにも小學校にのみ見得る現象である。殺戮を何とも思はぬなどは一層小兒と選ぶところはない。殊に小兒と似てゐるのは喇叭や軍歌に鼓舞されれば、何の爲に戦ふかも問はず、欣然と敵に當ることである。この故に軍人の誇りとするものは必ず小兒の玩具に似てゐる。緋緘の鎧や鍬形の兜は成人の趣味にかなつた者ではない。勳章も——わたしには實際不思議である。なせ軍人は酒にも酔はずに、勳章を下げて歩かれるのであらう？

武器

正義は武器に似たものである。武器は金を出さへすれば、敵にも味方にも買はれるであらう。正義も理窟をつけさへすれば、敵にも味方にも買はれるものである。古來「正義の敵」と云ふ名は砲彈のやうに投げかはされた。

しかし修辭につりこまれなければ、どちらがほんとうの「正義の敵」だか、滅多に判然したためしはない。

日本人の労働者は單に日本人と生まれたが故に、バナマから退去を命ぜられた。これは正義に反してゐる。亞米利加は新聞紙の傳へる通り、「正義の敵」と云はなければならぬ。しかし支那人の労働者も單に支那人と生まれたが故に、千住から退去を命ぜられた。これも正義に反してゐる。日本は新聞紙の傳へる通り、——いや、日本は二千年來、常に「正義の味方」である。正義はまだ日本の利害と一度も矛盾はしなかつたらしい。

武器それ自身は恐れるに足りない。恐れるのは武人の技倆である。正義それ自身も恐れるに足りない。恐れるのは煽動家の雄辯である。武后は人天を顧みず、冷然と正義を蹂躪した。しかし徐敬業の亂に當り、駱賓王の檄を讀

んだ時には色を失ふことを免れなかつた。「一坏土未乾 六尺孤安在」の雙句は天成のデマゴイクを待たない限り、發し得ない名言だつたからである。わたしは歴史を翻へす度に、遊就館を想ふことを禁じ得ない。過去の廊下には薄暗い中にさまざまの正義が陳列してある。青龍刀に似てゐるのは儒教の教へる正義であらう。騎士の槍に似てゐるのは基督教の教へる正義であらう。此處に太い棍棒がある。これは社會主義者の正義であらう。彼處に房のついた長劍がある。あれは國家主義者の正義であらう。わたしはさう云ふ武器を見ながら、幾多の戦ひを想像し、をのづから心慄の高まることがある、しかしまだ幸か不幸か、わたし自身その武器の一つを執りたいと思つた記憶はない。

尊王

十七世紀の佛蘭西の話である。或日 *Duc de Bourgogne* が *Abbe Choisy* にこんなことを尋ねた。シャルル六世は氣違ひだつた。その意味を婉曲に傳へる爲には、何と云へば好いのであらう？ アベは言下に返答した。「わたしならば唯かう申します。シャルル六世は氣違ひだつたと。」アベ・シヨアズイはこの答を一生の冒険の中に數へ、後のちまでも自慢にしてゐたさうである。十七世紀の佛蘭西はかう云ふ逸話の残つてゐる程、尊王の精神に富んでゐたと云ふ。しかし二十世紀の日本も尊王の精神に富んでゐることは當時の佛蘭西に劣らなさうである。まことに、——欣幸の至りに堪へない。

創作

藝術家は何時も意識的に彼の作品を作るのかも知れない。しかし作品そのものを見れば、作品の美醜の一半は藝術家の意識を超越した神秘の世界に存してゐる。一半？ 或は大半と云つても好い。

我我は妙に問ふに落ちず、語るに落ちるものである。我我の魂はをのづから作品に露るることを免れない。一刀一拜した古人の用意はこの無意識の境に對する畏怖を語つてはゐないであらうか？

創作は常に冒険である。所詮は人力を盡した後、天命に委かせるより仕方はない。

少時學語苦難圓 唯道工夫半未全 到老始知非力取 三分人事七分天

趙甌北の「論詩」の七絶はこの間の消息を傳へたものであらう。藝術は妙に底の知れない凄みを帯びてゐるものである。我我も金を欲しがらなければ、又名聞を好まなければ、最後に殆ど病的な創作熱に苦しまなければ、この無氣味な藝術などと格闘する勇氣は起らなかつたかも知れない。

鑑賞

藝術の鑑賞は藝術家自身と鑑賞家との協力である。云はば鑑賞家は一つの作品を課題に彼自身の創作を試みるのに過ぎない。この故に如何なる時代にも名聲を失はない作品は必ず種々の鑑賞を可能にする特色を具へてゐる。しかし種々の鑑賞を可能にすると云ふ意味はアナトオル・フランスの云ふやうに、何處か曖昧に出來てゐる爲、どう云ふ解釋を加へるのもたやすいと云ふ

意味ではあるまい。寧ろ廬山の峯々のやうに、種々の立ち場から鑑賞され得る多面性を具へてゐるのであらう。

古典

古典の作者の幸福なる所以は兎に角彼等の死んでゐることである。

又

我我の——或は諸君の幸福なる所以も兎に角彼等の死んでゐることである。

幻滅した藝術家

或一群の藝術家は幻滅の世界に住してゐる。彼等は愛を信じない。良心なるものをも信じない。唯昔の苦行者のやうに無何有の砂漠を家としてゐる。その點は成程氣の毒かも知れない。しかし美しい蜃氣樓は砂漠の天にのみ生ずるものである。百般の人事に幻滅した彼等も大抵藝術には幻滅してゐない。いや、藝術と云ひさへすれば、常人の知らない金色の夢は忽ち空中に出現するのである。彼等も實は思ひの外、幸福な瞬間を持たぬ訣ではない。

告白

完全に自己を告白することは何人にも出来ることではない。同時に又自己を告白せずには如何なる表現も出来るものではない。
ルツソオは告白を好んだ人である。しかし赤裸々の彼自身は懺悔録の中に

も発見出来ない。メリメは告白を嫌つた人である。しかし「コロンバ」は隠約の間に彼自身を語つてはゐないであらうか？ 所詮告白文學とその他の文學との境界線は見かけほどはつきりはしてゐないのである。

人生

——石黒定一君に——

もし游泳を學ばないものに泳げと命ずるものがあれば、何人も無理だと思ふであらう。もし又ランニングを學ばないものに駆けろと命ずるものがあれば、やはり理不盡だと思はざるを得まい。しかし我我は生まれた時から、かう云ふ莫迦げた命令を負はされてゐるのも同じことである。

我我は母の胎内にゐた時、人生に處する道を學んだであらうか？ しかも

胎内を離れるが早いか、兎に角大きい競技場に似た人生の中に踏み入るのである。勿論游泳を學ばないものは満足に泳げる理窟はない。同様にランニングを學ばないものは大抵人後に落ちさうである。すると我我も創痍を負はずに人生の競技場を出られる筈はない。

成程世人は云ふかも知れない。「前人の跡を見るが好い。あそこに君たちの手本がある」と。しかし百の游泳者や千のランナーを眺めたにしろ、忽ち游泳を覚えたり、ランニングに通じたりするものではない。のみならずその游泳者は悉く水を飲んでをり、その又ランナーは一人残らず競技場の土にまみれてゐる。見給へ、世界の名選手さへ大抵は得意の微笑のかけに澁面を隠してゐるではないか？

人生は狂人の主催に成つたオリムピック大會に似たものである。我我は人

生と闘ひながら、人生と闘ふことを學ばねばならぬ。かう云ふゲームの莫迦々々しさに憤慨を禁じ得ないものはさつさと埒外に歩み去るが好い。自殺も亦確かに一便法である。しかし人生の競技場に踏み止まりたいと思ふものは創痕を恐れずに闘はなければならぬ。

又

人生は一箱のマッチに似てゐる。重大に扱ふのは莫迦々々しい。重大に扱はなければ危険である。

又

人生は落丁の多い書物に似てゐる。一部を成すとは稱し難い。しかし兎に

角一部を成してゐる。

地上樂園

地上樂園の光景は屢詩歌にもうたはれてゐる。が、わたしはまだ残念ながら、さう云ふ詩人の地上樂園に住みたいと思つた覚えはない。基督教徒の地上樂園は畢竟退窟なるパノラマである。黄老の學者の地上樂園もつまりは索漠とした支那料理屋に過ぎない。況んや近代のユウトピアなどは——ウイラム・ジエムスの戦慄したことは何びとの記憶にも残つてゐるであらう。

わたしの夢みてゐる地上樂園はさう云ふ天然の温室ではない。同時に又さう云ふ學校を兼ねた食糧や衣服の配給所でもない。唯此處に住んでゐれば、

兩親は子供の成人と共に必ず息を引取るのである。それから男女の兄弟はたとひ悪人に生まれるにしろ、莫迦には決して生まれぬ結果、少しも迷惑をかけ合はないのである。それから女は妻となるや否や、家畜の魂を宿す爲に従順そのものに變るのである。それから子供は男女を問はず、兩親の意志や感情通りに、一日のうちは何回でも聾と啞と腰ぬけと盲目とになることが出来るのである。それから甲の友人は乙の友人よりも貧乏にならず、同時に又乙の友人は甲の友人よりも金持ちにならず、互ひに相手を褒め合ふことに無上の満足を感じるのである。それから——ざつとかう云ふ處を思へば好い。

これは何もわたし一人の地上樂園たるばかりではない。同時に又天下に充滿した善男善女の地上樂園である。唯古來の詩人や學者はその金色の瞑想の

中にかう云ふ光景を夢みなかつた。夢みなかつたのは別に不思議ではない。かう云ふ光景は夢みるにさへ、餘りに眞實の幸福に溢れすぎてゐるからである。

附記 わたしの甥はレムブラントの肖像畫を買ふことを夢みてゐる。しかし彼の小遣ひを十圓貰ふことは夢みてゐない。これも十圓の小遣ひは餘りに眞實の幸福に溢れすぎてゐるからである。

暴力

人生は常に複雑である。複雑なる人生を簡單にするものは暴力より外にある筈はない。この故に往往石器時代の腦髓しか持たぬ文明人は論争より殺人を愛するのである。

しかし亦權力も畢竟はパテントを得た暴力である。我我人間を支配する爲にも、暴力は常に必要なのかも知れない。或は又必要ではないのかも知れない。

「人間らしさ」

わたしは不幸にも「人間らしさ」に禮拜する勇氣は持つてゐない。いや、屢「人間らしさ」に輕蔑を感じることは事實である。しかし又常に「人間らしさ」に愛を感じることも事實である。愛を？——或は愛よりも憐憫かも知れない。が、兎に角「人間らしさ」にも動かされぬやうになつたとすれば、人生は到底住するに堪へない精神病院に變りさうである。Swiftの畢に發狂したのも當然の結果と云ふ外はない。

スウィフトは發狂する少し前に、梢だけ枯れた木を見ながら、「おれはあの木とよく似てゐる。頭から先に參るのだ」と呟いたことがあるさうである。この逸話は思ひ出す度にいつも戰慄を傳へずには置かない。わたしはスウィフトほど頭の好い一代の鬼才に生まれなかつたことをひそかに幸福に思つてゐる。

椎の葉

完全に幸福になり得るのは白痴にのみ與へられた特權である。如何なる樂天主義者にもせよ、笑顔に終止することの出来るものではない。いや、もし眞に樂天主義なるものの存在を許し得るとすれば、それは唯如何に幸福に絶望するかと云ふことのみである。

「家にあれば筍にもる飯も草まくら旅にしあれば椎の葉にもる」とは行旅の情をうたつたばかりではない。我我は常に「ありたい」ものの代りに「あり得る」ものと妥協するのである。學者はこの椎の葉にさまざまの美名を與へるであらう。が、無遠慮に手に取つて見れば、椎の葉はいつも椎の葉である。椎の葉の椎の葉たるを歎ずるのは椎の葉の筍たるを主張するよりも確かに尊敬に價してゐる。しかし椎の葉の椎の葉たるを一笑し去るよりも退窟であらう。少くとも生涯同一の歎を繰り返すことに倦まないのは滑稽であると共に不道德である。實際又偉大なる厭世主義者は澁面ばかり作つてはゐない。不治の病を負つたレオバルデイさへ、時には蒼ざめた薔薇の花に寂しい頬笑みを浮べてゐる。……

追記 不道德とは過度の異名である。

佛 陀

悉達多は王城を忍び出た後六年の間苦行した。六年の間苦行した所以は勿論王城の生活の豪華を極めてゐた祟りであらう。その證據にはナザレの大王の子は、四十日の斷食しかなかつたやうである。

又

悉達多は車匿に馬轡を執らせ、潜かに王城を後ろにした。が、彼の思辨癖は屢彼をメランコリアに沈ませたと云ふことである。すると王城を忍び出た後、ほつと一息ついたものは實際將來の釋迦無二佛だつたか、それとも彼の妻の耶輸陀羅だつたか、容易に斷定は出來ないかも知れない。

又
 悉達多は六年の苦行の後、菩提樹下に正覺に達した。彼の成道の傳説は如何に物質の精神を支配するかを語るものである。彼はまづ水浴してゐる。それから乳糜を食してゐる。最後に難陀婆羅と傳へられる牧牛の少女と話してゐる。

政治的天才

古來政治的天才とは民衆の意志を彼自身の意志とするもののやうに思はれてゐた。が、これは正反對であらう。寧ろ政治的天才とは彼自身の意志を民衆の意志とするもの、ことを云ふのである。少くとも民衆の意志であるかの

やうに信せしめるものを云ふのである。この故に政治的天才は俳優的天才を伴ふらしい。ナポレオンは「莊嚴と滑稽との差は僅かに一步である」と云つた。この言葉は帝王の言葉と云ふよりも名優の言葉にふさはしさうである。

又

民衆は大義を信ずるものである。が、政治的天才は常に大義そのものには一文の錢をも抛たないものである。唯民衆を支配する爲には大義の假面を用ひなければならぬ。しかし一度用ひたが最後、大義の假面は永久に脱することを得ないものである。もし又強いて脱さうとすれば、如何なる政治的天才も忽ち非命に仆れる外はない。つまり帝王も王冠の爲にをのづから支配を受けてゐるのである。この故に政治的天才の悲劇は必ず喜劇をも兼ねぬことは

ない。たとへば昔仁和寺の法師の鼎をかぶつて舞つたと云ふ「つれづれ草」の喜劇をも兼ねぬことはない。

戀は死よりも強し

「戀は死よりも強し」と云ふのはモオバスサンの小説にもある言葉である。が、死よりも強いものは勿論天下に戀ばかりではない。たとへばチブスの患者などのビスケットを一つ食つた爲に知れ切つた往生を遂げたりするのは食欲も死よりは強い證據である。食欲の外にも數へ挙げれば、愛國心とか、宗教的感激とか、人道的精神とか、利慾とか、名譽心とか、犯罪的本能とか——まだ死よりも強いものは澤山あるのに相違ない。つまりあらゆる情熱は死よりも強いものなのであらう。(勿論死に對する情熱は例外である。)且つ又戀は

さう云ふもののうちでも、特に死よりも強いかどうか、迂濶に斷言は出來ないらしい。一見、死よりも強い戀と見做され易い場合さへ、實は我我を支配してゐるのは佛蘭西人の所謂ボヴァリスムである。我我自身を傳奇の中の戀人のやうに空想するボヴァライ夫人以來の感傷主義である。

地獄

人生は地獄よりも地獄的である。地獄の與へる苦しみは一定の法則を破つたことはない。たとへば餓鬼道の苦しみは目前の飯を食はうとすれば飯の上に火の燃えるたぐひである。しかし人生の與へる苦しみは不幸にもそれほど單純ではない。目前の飯を食はうとすれば、火の燃えることもあると同時に、又存外樂樂と食ひ得ることもあるのである。のみならず樂樂と食ひ得た

後さへ、腸加太兒の起ることもあると同時に、又存外樂樂と消化し得ることもあるのである。かう云ふ無法則の世界に順應するのは何びとにも容易に出来るものではない。もし地獄に墮ちたとすれば、わたしは必ず咄嗟の間に餓鬼道の飯も掠め得るであらう。況や針の山や血の池などは二三年其處に住み慣れさへすれば格別跋涉の苦しみを感ぜないやうになつてしまふ筈である。

醜聞

公衆は醜聞を愛するものである。白蓮事件、有島事件、武者小路事件——公衆は如何にこれらの事件に無上の満足を見出したであらう。ではなぜ公衆は醜聞を——殊に世間に名を知られた他人の醜聞を愛するのであらう？ グルモンはこれに答へてゐる。——

「隠れたる自己の醜聞も當り前のやうに見せてくれるから。」
 グルモンの答は中つてゐる。が、必ずしもそればかりではない。醜聞さへ起し得ない俗人たちはあらゆる名士の醜聞の中に彼等の怯懦を辯解する好個の武器を見出すのである。同時に又實際には存しない彼等の優越を樹立する、好個の臺石を見出すのである。「わたしは白蓮女史ほど美人ではない。しかし白蓮女史よりも貞淑である。」「わたしは有島氏ほど才子ではない。しかし有島氏よりも世間を知つてゐる。」「わたしは武者小路氏ほど……」——公衆は如何にかう云つた後、豚のやうに幸福に熟睡したであらう。

又

天才の一面は明らかに醜聞を起し得る才能である。

輿論

輿論は常に私刑であり、私刑は又常に娛樂である。たとひピストルを用ふる代りに新聞の記事を用ひたとしても。

又

輿論の存在に價する理由は唯輿論を蹂躪する興味を興へることばかりである。

敵意

敵意は寒氣と選ぶ所はない。適度に感ずる時は爽快であり、且又健康を保

つ上には何びとも絶對に必要である。

ユウトピア

完全なるユウトピアの生れない所以は大體下の通りである。——人間性そのものを變へないとすれば、完全なるユウトピアの生まれる筈はない。人間性そのものを變へるとすれば、完全なるユウトピアと思つたものも忽ち又不完全に感せられてしまふ。

危険思想

危険思想とは常識を實行に移さうとする思想である。

悪

藝術的氣質を持つた青年の「人間の悪」を發見するのは誰よりも遅いのを常としてゐる。

二宮尊徳

わたしは小學校の讀本の中に二宮尊徳の少年時代の大事業してあつたのを覚えてゐる。貧家に人となつた尊徳は晝は農作の手傳ひをしたり、夜は草鞋を造つたり、大人のやうに働きながら、健氣にも獨學をつづけて行つたらしい。これはあらゆる立志譚のやうに——と云ふのはあらゆる通俗小説のやうに、感激を與へ易い物語である。實際又十五歳に足らぬわたしは尊徳の意氣に感

激すると同時に、尊徳ほど貧家に生まれなかつたことを不仕合せの一つにさへ考へてゐた。……

けれどもこの立志譚は尊徳に名譽を與へる代りに、當然尊徳の兩親には名譽を與へる物語である。彼等は尊徳の教育に寸毫の便宜をも與へなかつた。いや、寧ろ與へたものは障碍ばかりだつた位である。これは兩親たる責任上、明らかに恥辱と云はなければならぬ。しかし我々の兩親や教師は無邪氣にもこの事實を忘れてゐる。尊徳の兩親は酒飲みでも或は又博奕打ちでも好い。問題は唯尊徳である。どう云ふ艱難辛苦をしても獨學を廢さなかつた尊徳である。我我少年は尊徳のやうに勇猛の志を養はなければならぬ。

わたしは彼等の利己主義に驚嘆に近いものを感じてゐる。成程彼等には尊徳のやうに下男をも兼ねる少年は都合の好い息子に違ひない。のみならず後

年聲譽を博し、大いに父母の名を顯はしたりするのは好都合の上にも好都合である。しかし十五歳に足らぬわたしは尊徳の意氣に感激すると同時に、尊徳ほど貧家に生まれなかつたことを不仕合せの一つにさへ考へてゐた。丁度鎖に繋がれた奴隸のもつと太い鎖を欲しがらうに。

奴隸

奴隸廢止と云ふことは唯奴隸たる自意識を廢止すると云ふことである。我の社會は奴隸なしには一日も安全を保し難いらしい。現にあのプラトオンの共和國さへ、奴隸の存在を豫想してゐるのは必ずしも偶然ではないのである。

又

暴君を暴君と呼ぶことは危険だつたのに違ひない。が、今日は暴君以外に奴隸を奴隸と呼ぶこともやはり甚だ危険である。

悲劇

悲劇とはみづから羞づる所業を敢てしなければならぬことである。この故に萬人に共通する悲劇は排泄作用を行ふことである。

強弱

強者とは敵を恐れぬ代りに友人を恐れるものである。一撃に敵を打ち倒す

ことには何の痛痒も感じない代りに、知らず識らず友人を傷けることには兒女に似た恐怖を感じるものである。

弱者とは友人を恐れぬ代りに、敵を恐れるものである。この故に又至る處に架空の敵ばかり發見するものである。

S・Mの智慧

これは友人S・Mのわたしに話した言葉である。

辨證法の功績。——所詮何ものも莫迦げてゐると云ふ結論に到達せしめたこと。

少女。——どこまで行つても清冽な淺瀬。

早教育。——ふむ、それも結構だ。まだ幼稚園にゐるうちに智慧の悲しみ

を知ることには責任を持つことにも當らないからね。

追憶。——地平線の遠い風景畫。ちやんと仕上げもかゝつてゐる。

女。——メリイ・ストオブス夫人によれば女は少くとも二週間に一度、夫に情欲を感じるほど貞節に出來てゐるものらしい。

年少時代。——年少時代の憂鬱は全宇宙に對する驕慢である。

艱難汝を玉にす。——艱難汝を玉にするとすれば、日常生活に、思慮深い男は到底玉になれない筈である。

我等如何に生くべき乎。——未知の世界を少し残して置くこと。

社交

あらゆる社交はおのづから虚偽を必要とするものである。もし寸毫の虚偽

をも加へず、我我の友人知己に對する我我の本心を吐露するとすれば、古への管鮑の交りと雖も破綻を生ぜずにはゐなかつたであらう。管鮑の交りは少時間はず、我我は皆多少にもせよ、我我の親密なる友人知己を憎惡し或は輕蔑してゐる。が、憎惡も利害の前には銳鋒を收めるのに相違ない。且又輕蔑は多々益々恬然と虚偽を吐かせるものである。この故に我我の友人知己と最も親密に交る爲めには、互に利害と輕蔑とを最も完全に具へなければならぬ。これは勿論何びとも甚だ困難なる條件である。さもなければ我我はとうの昔に禮讓に富んだ紳士になり、世界も亦とうの昔に黄金時代の平和を現出したであらう。

瑣事

人生を幸福にする爲には、日常の瑣事を愛さなければならぬ。雲の光り、竹の戦ぎ、群雀の聲、行人の顔、——あらゆる日常の瑣事の中に無上の甘露味を感じなければならぬ。

人生を幸福にする爲には？——しかし瑣事を愛するものは瑣事の爲に苦しまなければならぬ。庭前の古池に飛びこんだ蛙は百年の愁を破つたであらう。が、古池を飛び出した蛙は百年の愁を興へたかも知れない。いや、芭蕉の一生は享樂の一生であると共に、誰の目にも受苦の一生である。我我も微妙に楽しむ爲には、やはり又微妙に苦しまなければならぬ。

人生を幸福にする爲には、日常の瑣事に苦しまなければならぬ。雲の光り、竹の戦ぎ、群雀の聲、行人の顔、——あらゆる日常の瑣事の中に墮地獄の苦痛を感じなければならぬ。

神

あらゆる神の屬性中、最も神の爲に同情するのは神には自殺の出来ないことである。

又

我我は神を罵殺する無数の理由を發見してゐる。が、不幸にも日本人は罵殺するのに價ひするほど、全能の神を信じてゐない。

民衆

民衆は穩健なる保守主義者である。制度、思想、藝術、宗教、——何もの

も民衆に愛される爲には、前時代の古色を帯びなければならぬ。所謂民衆藝術家の民衆の爲に愛されないのは必ずしも彼等の罪ばかりではない。

又

民衆の愚を發見するのは必ずしも誇るに足ることではない。が、我我自身も亦民衆であることを發見するのは兎も角も誇るに足ることである。

又

古人は民衆を愚にすることを治國の大道に數へてゐた。丁度まだこの上にも愚にすることの出来るやうに。——或は又どうかすれば賢にでもすることの出来るやうに。

チエホフの言葉

チエホフはその手記の中に男女の差別を論じてゐる。——「女は年をとると共に、益々女の事に従ふものであり、男は年をとると共に、益々女の事から離れるものである。」

しかしこのチエホフの言葉は男女とも年をとると共に、おのづから異性と交渉に立ち入らないと云ふのも同じことである。これは三歳の童兒と雖もとうに知つてゐることと云はなければならぬ。のみならず男女の差別よりも寧ろ男女の無差別を示してゐるものと云はなければならぬ。

服装

少くとも女人の服装は女人自身の一部である。啓吉の誘惑に陥らなかつたのは勿論道念にも依つたのであらう。が、彼を誘惑した女人は啓吉の妻の借着をしてゐる。もし借着をしてゐなかつたとすれば、啓吉もさほど樂々とは誘惑の外に出られなかつたかも知れない。

註 菊池寛氏の「啓吉の誘惑」を見よ。

處女崇拜

我我は處女を妻とする爲にどの位妻の選擇に滑稽なる失敗を重ねて來たか、もうそろそろ處女崇拜には背中を向けても好い時分である。

又

處女崇拜は處女たる事實を知つた後に始まるものである。即ち卒直なる感情よりも零細なる知識を重んずるものである。この故に處女崇拜者は戀愛上の術學者と云はなければならぬ。あらゆる處女崇拜者の何か嚴然と構へてゐるのも或は偶然ではないかも知れない。

又

勿論處女らしさ崇拜は處女崇拜以外のものである。この二つを同義語とするものは恐らく女人の俳優的才能を餘りに輕々に見てゐるものであらう。

禮法

或女學生はわたしの友人にかう云ふ事を尋ねたさうである。

「一體接吻をする時には目をつぶつてゐるものなのでせうか？ それともあいてゐるものなのでせうか？」

あらゆる女學校の教課の中に戀愛に關する禮法のないのはわたしもこの女學生と共に甚だ遺憾に思つてゐる。

貝原益軒

わたしはやはり小學時代に貝原益軒の逸事を學んだ。益軒は嘗て乗合船の中に一人の書生と一しよになつた。書生は才力に誇つてゐたと見え、滔々と古今の學藝を論じた。が、益軒は一言も加へず、靜かに傾聽するばかりだつた。その内に船は岸に泊した。船中の客は別れるのに臨んで姓名を告げるのを例としてゐた。書生は始めて益軒を知り、この一代の大儒の前に忸怩とし

て先刻の無禮を謝した。——かう云ふ逸事を學んだのである。
 當時のわたしはこの逸事の中に謙讓の美德を發見した。少くとも發見する爲に努力したことは事實である。しかし今は不幸にも寸毫の教訓さへ發見出來ない。この逸事の今のわたしにも多少の興味を與へるは僅かに下のやうに考へるからである。——

一 無言に終始した益軒の侮蔑は如何に辛辣を極めてゐたか！

二 書生の恥ぢるのを欣んだ同船の客の喝采は如何に俗惡を極めてゐたか！

三 益軒の知らぬ新時代の精神は年少の書生の放論の中にも如何に潑刺と鼓動してゐたか！

或辯護

或新時代の評論家は「蝟集する」と云ふ意味に「門前雀羅を張る」の成語を用ひた。「門前雀羅を張る」の成語は支那人の作つたものである。それを日本人の用ふるのに必ずしも支那人の用法を踏襲しなければならぬと云ふ法はない。もし通用さへするならば、たとへば「彼女の頬笑みは門前雀羅を張るやうだつた」と形容しても好い筈である。

もし通用さへするならば、——萬事はこの不可思議なる「通用」の上に懸つてゐる。たとへば「わたくし小説」もさうではないか？ Ichi-Romanと云ふ意味は一人稱を用ひた小説である。必ずしもその「わたくし」なるものは作家自身と定まつてはゐない。が、日本の「わたくし」小説は常にその「わ

たくし」なるものを作家自身とする小説である。いや、時には作家自身の閱歴談と見られたが最後、三人稱を用ひた小説さへ「わたくし」小説と呼ばれてゐるらしい。これは勿論獨逸人の——或は全西洋人の用法を無視した新例である。しかし全能なる「通用」はこの新例に生命を與へた。「門前雀羅を張る」の成語もいつかはこれと同じやうに意外の新例を生ずるかも知れない。すると或評論家は特に學識に乏しかつたのではない。唯聊か時流の外に新例を求むるのに急だつたのである。その評論家の揶揄を受けたのは、——兎に角あらゆる先覺者は常に薄命に甘んじなければならぬ。

制限

天才もそれ／＼乗り越え難い或制限に拘束されてゐる。その制限を發見す

ることは多少の寂しさを與へぬこともない。が、それはいつの間にか却つて親しみを與へるものである。丁度竹は竹であり、鳶は鳶である事を知つたやうに。

火星

火星の住民の有無を問ふことは我我の五感に感ずることの出来る住民の有無を問ふことである。しかし生命は必ずしも我我の五感に感ずることの出来る條件を具へるとは限つてゐない。もし火星の住民も我我の五感を超越した存在を保つてゐるとすれば、彼等の一群は今夜も亦篠懸を黄ばませる秋風と共に銀座へ來てゐるかも知れないのである。

Blanqui の夢

宇宙の大は無限である。が、宇宙を造るものは六十幾つかの元素である。是等の元素の結合は如何に多數を極めたとしても、畢竟有限を脱することは出来ない。すると是等の元素から無限大の宇宙を造る爲には、あらゆる結合を試みる外にも、その又あらゆる結合を無限に反覆して行かなければならぬ。して見れば我我の棲息する地球も、——是等の結合の一つたる地球も太陽系中の一惑星に限らず、無限に存在してゐる筈である。この地球上のナポレオンはマレンゴオの戦に大勝を博した。が、茫々たる大虚に浮んだ他の地球上のナポレオンは同じマレンゴオの戦に大敗を蒙つてゐるかも知れない。……これは六十七歳のブランキの夢みた宇宙観である。議論の是非は問ふ所で

はない。唯ブランキは牢獄の中にかう云ふ夢をペンにした時、あらゆる革命に絶望してゐた。このことだけは今日もなほ何か我我の心の底へ滲み渡る寂しさを蓄へてゐる。夢は既に地上から去つた。我我も慰めを求める爲には何萬億哩の天上へ、——宇宙の夜に懸つた第二の地球へ輝かしい夢を移さなければならぬ。

庸才

庸才の作品は大作にもせよ、必ず窓のない部屋に似てゐる。人生の展望は少しも利かない。

機智

機智とは三段論法を缺いた思想であり、彼等の所謂「思想」とは思想を缺いた三段論法である。

又

機智に對する嫌惡の念は人類の疲勞に根ざしてゐる。

政治家

政治家の我我素人よりも政治上の知識を誇り得るのは紛紛たる事實の知識だけである。畢竟某黨の某首領はどう言ふ帽子をかぶつてゐるかと言ふのと大差のない知識ばかりである。

又

所謂「床屋政治家」とはかう言ふ知識のない政治家である。若し夫れ識見を論ずれば必ずしも政治家に劣るものではない。且又利害を超越した情熱に富んでゐることは常に政治家よりも高尚である。

事實

しかし紛紛たる事實の知識は常に民衆の愛するものである。彼等の最も知りたいのは愛とは何かと言ふことではない。クリストは私生兒かどうかと言ふことである。

武者修業

わたしは従来武者修業とは四方の劍客と手合せをし、武技を磨くものだと思つてゐた。が、今になつて見ると、實は己ほど強いものの餘り天下にゐないことを發見する爲にするものだつた。——宮本武藏傳讀後。

ユウゴオ

全フランスを蔽ふ一片のパン。しかもバターはどう考へても、餘りたつぷりはついてゐない。

ドストエフスキイ

ドストエフスキイの小説はあらゆる戯畫に充ち満ちてゐる。尤もその又戯畫の大半は惡魔をも憂鬱にするに違ひない。

フロオベル

フロオベルのわたしに教へたものは美しい退屈もあると言ふことである。

モオバスサン

モオバスサンは氷に似てゐる。尤も時には氷砂糖にも似てゐる。

ボオ

ボオはスフィンクスを作る前に解剖學を研究した。ボオの後代を震撼した

秘密はこの研究に潜んでゐる。

或資本家の論理

「藝術家の藝術を賣るのも、わたしの蟹の鐘詰めを賣るのも、格別變りのある筈はない。しかし藝術家は藝術と言へば、天下の寶のやうに思つてゐる。あゝ言ふ藝術家の響みに倣へば、わたしも亦一鐘六十錢の蟹の鐘詰めを自慢しなければならぬ。不肖行年六十一、まだ一度も藝術家のやうに莫迦莫迦しい己惚れを起したことはない。」

批評學

——佐佐木茂索君に——

或天氣の好い午前である。博士に化けた Mephistopheles は或大學の講壇に批評學の講義をしてゐた。尤もこの批評學は Kant の Kritik や何かではない。只如何に小説や戯曲の批評をするかと言ふ學問である。

「諸君、先週わたしの申し上げた所は御理解になつたかと思ひますから、今日は更に一步進んだ『半肯定論法』のことを申し上げます。『半肯定論法』とは何かと申すと、これは讀んで字の通り、或作品の藝術的價値を半ば肯定する論法であります。しかしその『半ば』なるものは『より悪い半ば』でなければなりません。『より善い半ば』を肯定することは頗るこの論法には危険であります。

「たとへば日本の櫻の花の上にこの論法を用ひて御覽なさい。櫻の花の『より善い半ば』は色や形の美しさであります。けれどもこの論法を用ふるため

には『より善い半ば』よりも『より悪い半ば』——即ち櫻の花の匂ひを肯定しなければなりません。つまり『匂ひは正にある。が、畢竟それだけだ』と斷案を下してしまふのであります。若し又萬一『より悪い半ば』の代りに『より善い半ば』を肯定したとすれば、どう言ふ破綻を生じますか？『色や形は正に美しい。が、畢竟それだけだ』——これでは少しも櫻の花を貶したことはなりません。

「勿論批評學の問題は如何に或小説や戯曲を貶すかと言ふことに關してゐます。しかしこれは今更のやうに申し上げる必要はありませんまい。

「ではこの『より善い半ば』や『より悪い半ば』は何を標準に區別しますか？かう言ふ問題を解決する爲には、これも度たび申し上げた價值論へ溯らなければなりません。價值は古來信せられたやうに作品そのものの中にある譯で

はない、作品を鑑賞する我々の心の中にあるものであります。すると『より善い半ば』や『より悪い半ば』は我々の心を標準に、——或は一時代の民衆の何を愛するかを標準に區別しなければなりません。

「たとへば今日の民衆は日本風の草花を愛しません。即ち日本風の草花は悪いものであります。又今日の民衆はブラジル珈琲を愛してゐます。即ちブラジル珈琲は善いものに違ひありません。或作品の藝術的價値の『より善い半ば』や『より悪い半ば』も當然かう言ふ例のやうに區別しなければなりません。

「この標準を用ひずに、美とか真とか善とか言ふ他の標準を求めるのは最も滑稽な時代錯誤であります。諸君は赤らんだ麥藁帽のやうに舊時代を捨てなければなりません。善悪は好悪を超越しない、好悪は即ち善悪である、愛憎

は即ち善悪である、——これは『半肯定論法』に限らず、苟くも批評學に志した諸君の忘れてはならぬ法則であります。

「扱『半肯定論法』とは大體上の通りであります、最後に御注意を促した
いのは『それだけだ』と言ふ言葉であります。この『それだけだ』と言ふ言
葉は是非使はなければなりません。第一『それだけだ』と言ふ以上、『それ』
即ち『より悪い半ば』を肯定してゐることは確かであります。しかし又第二
に『それ』以外のものを否定してゐることも確かであります。即ち『それだ
けだ』と言ふ言葉は頗る一揚一抑の趣に富んでゐると申さなければなりません。
が、更に微妙なことには第三に『それ』の藝術的價值さへ、隱約の間に
否定してゐます。勿論否定してゐると言つても、なせ否定するかと言ふこと
は説明も何もしてゐません。只言外に否定してゐる、——これはこの『それ

だけだ』と言ふ言葉の最も著しい特色であります。顯にして晦、肯定にして
否定とは正に『それだけだ』の謂でありませう。

この『半肯定論法』は『全否定論法』或は『木に縁つて魚を求むる論法』
よりも信用を博し易いかと思ひます。『全否定論法』或は『木に縁つて魚を求
むる論法』とは先週申し上げた通りであります、念の爲めにざつと繰り返
すと、或作品の藝術的價值をその藝術的價值そのものにより、全部否定する
論法であります。たとへば或悲劇の藝術的價值を否定するのに、悲慘、不快、
憂鬱等の非難を加へる事と思へばよろしい。又この非難を逆に用ひ、幸福、
愉快、輕妙等を缺いてゐると罵つてもかまひません。一名『木に縁つて魚を
求むる論法』と申すのは後に擧げた場合を指したのであります。『全否定論法』
或は『木に縁つて魚を求むる論法』は痛快を極めてゐる代りに、時には偏頗

の疑ひを招かないとも限りません。しかし『半肯定論法』は兎に角或作品の藝術的價値を半ばは認めてゐるのでありますから、容易に公平の看を與へ得るのであります。

「就いては演習の題目に佐佐木茂索氏の新著『春の外套』を出しますから、來週までに佐佐木氏の作品へ『半肯定論法』を加へて來て下さい。(この時若い聽講生が一人「先生、『全否定論法』を加へてはいけませんか?」と質問する)いや、『全否定論法』を加へることは少くとも當分の間は見合せなければなりません。佐佐木氏は兎に角聲名のある新進作家でありますから、やはり『半肯定論法』位を加へるのに限ると思ひます。……」

x x x x

一週間たつた後、最高點を採つた答案は下に掲げる通りである。

「正に器用には書いてゐる。が、畢竟それだけだ。」

親子

親は子供を養育するのに適してゐるかどうかは疑問である。成程牛馬は親の爲に養育されるのに違ひない。しかし自然の名のもとにこの舊習の辯護するのは確かに親の我儘である。若し自然の名のもとに如何なる舊習も辯護出來るならば、まづ我我は未開人種の掠奪結婚を辯護しなければならぬ。

又

子供に對する母親の愛は最も利己心のない愛である。が、利己心のない愛は必ずしも子供の養育に最も適したものではない。この愛の子供に與へる影

響は——少くとも影響の大半は暴君にするか、弱者にするかである。

又

人生の悲劇の第一幕は親子となつたことにはじまつてゐる。

又

古來如何に大勢の親はかう言ふ言葉を繰り返したであらう。——「わたしは畢竟失敗者だつた。しかしこの子だけは成功させなければならぬ。」

可能

我々はしたいことの出来るものではない。只出来ることをするものである。

これは我我個人ばかりではない。我々の社會も同じことである。恐らくは神も希望通りにこの世界を造ることは出来なかつたであらう。

ムアアの言葉

ジョオヂ・ムアアは「我死せる自己の備忘録」の中にかう言ふ言葉を挿んでゐる。——「偉大なる畫家は名前を入れる場所をちやんと心得てゐるものである。又決して同じ所に二度と名前を入れぬものである。」

勿論「決して同じ所に二度と名前を入れぬこと」は如何なる畫家にも不可能である。しかしこれは咎めずとも好い。わたしの意外に感じたのは「偉大なる畫家は名前を入れる場所をちやんと心得てゐる」と言ふ言葉である。東洋の畫家には未だ嘗て落款の場所を輕視したるものはない。落款の場所に注

意せよなどと言ふのは陳套語である。それを特筆するムアアを思ふと、坐ろに東西の差を感せざるを得ない。

大作

大作を傑作と混同するものは確かに鑑賞上の物質主義である。大作は手間賃の問題にすぎない。わたしはミケル・アンヂェロの「最後の審判」の壁畫よりも遙かに六十何歳かのレムブランドの自畫像を愛してゐる。

わたしの愛する作品

わたしの愛する作品は、——文藝上の作品は畢竟作家の人間を感ずることの出来る作品である。人間を——頭腦と心臓と官能とを一人前に具へた人間

を。しかし不幸にも大抵の作家はどれか一つを缺いた片輪である。(尤も時には偉大なる片輪に敬服することもない訣ではない。)

「虹霓關」を見て

男の女を獵するのではない。女の男を獵するのである。——シヨウは「人と超人と」の中にこの事實を戯曲化した。しかしこれを戯曲化したものは必しもシヨウにはじまるのではない。わたくしは梅蘭芳の「虹霓關」を見、支那にも既にこの事實に注目した戯曲家のあるのを知つた。のみならず「戯考」は「虹霓關」の外にも、女の男を促へるのに孫吾の兵機と劍戟とを用ひた幾多の物語を傳へてゐる。

「董家山」の女主人公金蓮、「轅門斬子」の女主人公桂英、「雙鎖山」の女主人

公金定等は悉かう言ふ女傑である。更に「馬上縁」の女主人公梨花を見れば彼女の愛する少年將軍を馬上に俘にするばかりではない。彼の妻にすまぬと言ふのを無理に結婚してしまふのである。胡適氏はわたしにかう言つた。——「わたしは『四進士』を除きさへすれば、全京劇の價値を否定したい。」しかし是等の京劇は少くとも甚だ哲學的である。哲學者胡適氏はこの價値の前に多少氏の雷霆の怒を和げる訣には行かないであらうか？

經驗

經驗ばかりにたよるのは消化力を考へずに食物ばかりにたよるものである。同時に又經驗を徒らにしない能力ばかりにたよるのもやはり食物を考へずに消化力ばかりにたよるものである。

アキレス

希臘の英雄アキレスは踵だけ不死身ではなかつたさうである。——即ちアキレスを知る爲にはアキレスの踵を知らなければならぬ。

藝術家の幸福

最も幸福な藝術家は晩年に名聲を得る藝術家である。國木田獨歩もそれを思へば、必しも不幸な藝術家ではない。

好人物

女は常に好人物を夫に持ちたがるものではない。しかし男は好人物を常に

友だちに持ちたがるものである。

又

好人物は何よりも先に天上の神に似たものである。第一に歡喜を語るのに好い。第二に不平を訴へるのに好い。第三に——ゐてもゐないでも好い。

罪

「その罪を憎んでその人を憎まず」とは必しも行ふに難いことではない。大抵の子は大抵の親にちやんとこの格言を實行してゐる。

桃李

「桃李言はざれども、下自ら蹊を成す」とは確かに知者の言である。尤も「桃李言はざれども」ではない。實は「桃李言はざれば」である。

偉大

民衆は人格や事業の偉大に籠絡されることを愛するものである。が、偉大に直面することは有史以來愛したことはない。

廣告

「侏儒の言葉」十二月號の「佐佐木茂索君の爲に」は佐佐木君を貶したのでありません。佐佐木君を認めない批評家を嘲つたものであります。かう言ふことを廣告するのは「文藝春秋」の讀者の頭腦を輕蔑することになるのか

も知れません。しかし實際或批評家は佐佐木君を貶したものだと思ひこんでゐたさうであります。且又この批評家の亞流も少くないやうに聞き及びました。その爲に一言廣告します。尤もこれを公にするのはわたくしの發意ではありません。實は先輩里見君の煽動によつた結果であります。どうかこの廣告に憤る讀者は里見君に非難を加へて下さい。「侏儒の言葉」の作者。

追加廣告

前掲の廣告中、「里見君に非難を加へて下さい」と言つたのは勿論わたしの常談であります。實際は非難を加へずともよろしい。わたしは或批評家の代表する一團の天才に敬服した余り、どうも多少ふだんよりも神經質になつたやうであります。同上

再追加廣告

前掲の追加廣告中、「或批評家の代表する一團の天才に敬服した」と言ふのは勿論反語と言ふものであります。同上

藝術

畫力は三百年、書力は五百年、文章の力は千古無窮とは王世貞の言ふ所である。しかし敦煌の發掘品等に徴すれば、書畫は五百年を閱した後にも依然として力を保つてゐるらしい。のみならず文章も千古無窮に力を保つかどうかは疑問である。觀念も時の支配の外に超然としてゐることの出来るものではない。我々の祖先は「神」と言ふ言葉に衣冠東帶の人物を髣髴してゐた。

しかし我我は同じ言葉に髯の長い西洋人を髯髯してゐる。これはひとり神に限らず、何ごとにも起り得るものと思はなければならぬ。

又

わたしはいつか東洲齋寫樂の似顔畫を見たことを覚えてゐる。その畫中の人物は緑いろの光琳波を描いた扇面を胸に開いてゐた。それは全體の色彩の効果を強めてゐるのに違ひなかつた。が、廓大鏡に覗いて見ると、緑いろをしてゐるのは緑青を生じた金いろだつた。わたしはこの一枚の寫樂に美しさを感じたのは事實である。けれどもわたしの感じたのは寫樂の捉へた美しさと異つてゐたのも事實である。かう言ふ變化は文章の上にもやはり起るものと思はなければならぬ。

又

藝術も女と同じことである。最も美しく見える爲には一時代の精神的雰圍氣或は流行に包まれなければならぬ。

又

のみならず藝術は空間的にもやはり軛を負はされてゐる。一國民の藝術を愛する爲には一國民の生活を知らなければならぬ。東禪寺に浪士の襲撃を受けた英吉利の特命全權公使サア・ルサアフ・オド・オルコックは我我日本人の音樂にも騒音を感じる許りだつた。彼の「日本に於ける三年間」はかう言ふ一節を含んでゐる。——「我我は坂を登る途中、ナイティンゲルの聲に近

い鶯の聲を耳にした。日本人は鶯に歌を教へたと言ふことである。それは若しほんたうとすれば、驚くべきことに違ひない。元來日本人は音楽と言ふものを自ら教へることも知らないのであるから。」(第二卷第二十九章)

天才

天才とは僅かに我我と一步を隔てたものことである。只この一步を理解する爲には百里の半ばを九十九里とする超數學を知らなければならぬ。

又

天才とは僅かに我我と一步を隔てたものことである。同時代は常にこの一步の千里であることを理解しない。後代は又この千里の一步であることを

盲目である。同時代はその爲に天才を殺した。後代は又その爲に天才の前に香を焚いてゐる。

又

民衆も天才を認めることに吝かであるとは信じ難い。しかしその認めかたは常に頗る滑稽である。

又

天才の悲劇は「小ぢんまりした、居心の好い名聲」を興へられることである。

又

耶蘇「我笛吹けども、汝等踊らず。」
彼等「我等踊れども、汝足らはず。」

謹

我我は如何なる場合にも、我我の利益を擁護せぬものに「清き一票」を投ずる筈はない。この「我我の利益」の代りに「天下の利益」を置き換へるのは全共和制度の謊である。この謊だけはゾグイエットの治下にも消滅せぬものと思はなければならぬ。

又

一體になつた二つの觀念を採り、その接觸點を吟味すれば、諸君は如何に多數の謊に養はれてゐるかを發見するであらう。あらゆる成語はこの故に常に一つの問題である。

又

我我の社會に合理的外觀を與へるものは實はその不合理の——その餘りに甚しい不合理の爲ではないであらうか？

レニン

わたしの最も驚いたのはレニンの餘りに當り前の英雄だつたことである。

賭博

偶然即ち神と闘ふものは常に神祕的威嚴に満ちてゐる。賭博者も亦この例に洩れない。

又

古來賭博に熱中した厭世主義者のないことは如何に賭博の人生に酷似してゐるかを示すものである。

又

法律の賭博を禁ずるのは賭博に依る富の分配法そのものを非とする爲ではない。實は唯その經濟的ディレッタントイズムを非とする爲である。

懷疑主義

懷疑主義も一つの信念の上に、——疑ふことは疑はぬと言ふ信念の上に立つものである。成程それは矛盾かも知れない。しかし懷疑主義は同時に又少しも信念の上に立たぬ哲學のあることをも疑ふものである。

正直

若し正直になるとすれば、我我は忽ち何びとも正直にならぬことを見出すであらう。この故に我我は正直になることに不安を感せずにはゐられぬの

である。

虚偽

わたしは或嘘つきを知つてゐた。彼女は誰よりも幸福だつた。が、余りに嘘の巧みだつた爲にほんたうのことを話してゐる時さへ嘘をついてゐるとしか思はれなかつた。それだけは確かに誰の目にも彼女の悲劇に違ひなかつた。

又

わたしも亦あらゆる藝術家のやうに寧ろ嘘には巧みだつた。が、いつも彼女には一籌を輸する外はなかつた。彼女は實に去年の嘘をも五分前の嘘のやうに覺えてゐた。

わたしは不幸にも知つてゐる。時には嘘に依る外は語られぬ眞實もあることを。

又

諸君

諸君は青年の藝術の爲に墮落することを恐れてゐる。しかしまづ安心し給へ。諸君ほどは容易に墮落しない。

又

諸君は藝術の國民を毒することを恐れてゐる。しかしまづ安心し給へ。少

くとも諸君を毒することは絶対に藝術には不可能である。二千年來藝術の魅力を理解せぬ諸君を毒することは。

忍 從

忍從はロマンティックな卑屈である。

企 圖

成すことは必しも困難ではない。が、欲することは常に困難である。少くとも成すに足ることを欲するのは。

又

彼等の大小を知らんとするものは彼等の成したことに依り、彼等の成さんとしたことを見なければならぬ。

兵 卒

理想的兵卒は苟くも上官の命令には絶対に服従しなければならぬ。絶対に服従することは絶対に批判を加へぬことである。即ち理想的兵卒はまづ理性を失はなければならぬ。

又

理想的兵卒は苟くも上官の命令には絶対に服従しなければならぬ。絶対に服従することは絶対に責任を負はぬことである。即ち理想的兵卒はまづ無責

任を好まなければならぬ。

軍事教育

軍事教育と言ふものは畢竟只軍事用語の知識を與へるばかりである。その他の知識や訓練は何も特に軍事教育を待た後に得られるものではない。現に海陸軍の學校さへ、機械學、物理學、應用化學、語學等は勿論、劍道、柔道、水泳等にもそれ〴〵専門家を備つてゐるではないか？ しかも更に考へて見れば、軍事用語も學術用語と違ひ、大部分は通俗的用語である。すると軍事教育と言ふものは事實上ないものと言はなければならぬ。事實上ないものの利害得失は勿論問題にはならぬ筈である。

勤儉尙武

「勤儉尙武」と言ふ成語位、無意味を極めてゐるものはない。尙武は國際的奢侈である。現に列強は軍備の爲に大金を費してゐるではないか？ 若し「勤儉尙武」と言ふことも痴人の談でないとすれば、「勤儉遊蕩」と言ふこともやはり通用すると言はなければならぬ。

日本人

我我日本人の二千年來君に忠に親に孝だつたと思ふのは猿田彦命もコスメティックをつけてゐたと思ふのと同じことである。もうそろ〴〵ありのままの歴史的事實に徹して見ようではないか？

倭寇

倭寇は我我日本人も優に列強に悟するに足る能力のあることを示したものである。我我は盜賊、殺戮、姦淫等に於ても、決して「黄金の島」を探しに來た西班牙人、葡萄牙人、和蘭人、英吉利人等に劣らなかつた。

つれづれ草

わたしは度たびかう言はれてゐる。——「つれづれ草などは定めしお好きでせう？」しかし不幸にも「つれづれ草」などは未嘗愛讀したことはない。正直な所を白状すれば「つれづれ草」の名高いのもわたしには殆ど不可解である。中學程度の教科書に便利であることは認めるにもしろ。

徴候

戀愛の徴候の一つは彼女は過去に何人の男を愛したか、或はどう言ふ男を愛したかを考へ、その架空の何人かに漠然とした嫉妬を感じることである。

又

又戀愛の徴候の一つは彼女に似た顔を發見することに極度に鋭敏になることである。

戀愛と死と

戀愛の死を想はせるのは進化論的根據を持つてゐるのかも知れない。蜘蛛

や蜂は交尾を終ると、忽ち雄は雌の爲に刺し殺されてしまふのである。わたしは伊太利の旅役者の歌劇「カルメン」を演ずるのを見た時、どうもカルメンの一舉一動に蜂を感じてならなかつた。

身代り

我我は彼女を愛する爲に往々彼女の外の女人を彼女の身代りにするものである。かう言ふ羽目に陥るのは必しも彼女の我我を却けた場合に限る訣ではない。我我は時には怯懦の爲に、時には又美的要求の爲にこの残酷な慰安の相手に一人の女人を使ひ兼ねぬのである。

結婚

結婚は性慾を調節することには有効である。が、戀愛を調節することには有効ではない。

又

彼は二十代に結婚した後、一度も戀愛關係に陥らなかつた。何と言ふ俗悪さ加減!

多忙

我我を戀愛から救ふものは理性よりも寧ろ多忙である。戀愛も亦完全に行はれる爲には何よりも時間を持たなければならぬ。ウエルテル、ロミオ、トリストアン——古來の戀人を考へて見ても、彼等は皆閑人ばかりである。

男子

男子は由來戀愛よりも仕事を尊重するものである。若しこの事實を疑ふならば、バルザックの手紙を読んで見るが好い。バルザックはハンスカ伯爵夫人に「この手紙も原稿料に換算すれば、何フランを越えてゐる」と書いてゐる。

行儀

昔わたしの家に入りました男まさりの女髪結は娘を一人持つてゐた。わたしは未だに蒼白い顔をした十二三の娘を覚えてゐる。女髪結はこの娘に行儀を教へるのにやかましかつた。殊に枕をはずすことにはその都度折檻を加へ

てゐたらしい。が、近頃ふと聞いた話によれば、娘はもう震災前に藝者になつたとか言ふことである。わたしはこの話を聞いた時、ちよつともうの哀れに感じたものの、微笑しない訣には行かなかつた。彼女は定めし藝者になつても、厳格な母親の躰け通り、枕だけははずすまいと思つてゐるであらう。……

自由

誰も自由を求めぬものはない。が、それは外見だけである。實は誰も肚の底では少しも自由を求めてゐない。その證據には人命を奪ふことに少しも躊躇しない無頼漢さへ、金匱無缺の國家の爲に某某を殺したと言つてゐるではないか？　しかし自由とは我我の行爲に何の拘束もないことであり、即ち神だの道德だの或は又社會的習慣だのと連帶責任を負ふことを潔しとしないも

のである。

又

自由は山嶺の空氣に似てゐる。どちらも弱い者には堪へることは出来ない。

又

まことに自由を眺めることは直ちに神々の顔を見ることである。

又

自由主義、自由戀愛、自由貿易、——どの「自由」も生憎杯の中に多量の水を混じてゐる。しかも大抵はたまり水を。

言行一致

言行一致の美名を得る爲にはまづ自己辯護に長じなければならぬ。

方便

一人を欺かぬ聖賢はあつても、天下を欺かぬ聖賢はない。佛家の所謂善巧方便とは畢竟精神上のマキアヴェリズムである。

藝術至上主義者

古來熱烈なる藝術至上主義者は大抵藝術上の去勢者である。丁度熱烈なる國家主義者は大抵亡國の民であるやうに——我我は誰でも我我自身の持つて

あるものを欲しがらるものではない。

唯物史観

若し如何なる小説家もマルクスの唯物史観に立脚した人生を寫さなければならぬならば、同様に又如何なる詩人もコペルニクスの地動説に立脚した日月山川を歌はなければならぬ。が、「太陽は西に沈み」と言ふ代りに「地球は何度何分廻轉し」と言ふのは必しも常に優美ではあるまい。

支那

螢の幼蟲は蝸牛を食ふ時に全然蝸牛を殺してはしまはぬ。いつも新らしい肉を食ふ爲に蝸牛を癡痺させてしまふだけである。我日本帝國を始め、列強

の支那に對する態度は畢竟この蝸牛に對する螢の態度と選ぶ所はない。

又

今日の支那の最大の悲劇は無数の國家的羅曼主義者即ち「若き支那」の爲に鐵の如き訓練を與へるに足る一人のムツソリニもゐないことである。

小説

本當らしい小説とは單に事件の發展に偶然性の少ないばかりではない。恐らくは人生に於けるよりも偶然性の少ない小説である。

文章

文章の中にある言葉は辭書の中にある時よりも美しさを加へてゐなければならぬ。

又

彼等は皆樗牛のやうに「文は人なり」と稱してゐる。が、いづれも内心では「人は文なり」と思つてゐるらしい。

女の顔

女は情熱に驅られると、不思議にも少女らしい顔をするものである。尤もその情熱なるものはバラソルに對する情熱でも差支へない。

世間智

消火は放火ほど容易ではない。かう言ふ世間智の代表的所有者は確かに「ベル・アミ」の主人公であらう。彼は戀人をつくる時にもちやんともう絶縁することを考へてゐる。

又

單に世間に處するだけならば、情熱の不足などは患はずとも好い。それよりも寧ろ危険なのは明らかに冷淡さの不足である。

恒産

恒産のないものに恒心のなかつたのは二千年ばかり昔のことである。今日では恒産のあるものは寧ろ恒心のないものらしい。

彼等

わたしは實は彼等夫婦の戀愛もなしに相抱いて暮らしてゐることに驚嘆してゐた。が、彼等はどうか云ふ譯か、戀人同志の相抱いて死んでしまつたことに驚嘆してゐる。

作家所生の言葉

「振つてゐる」「高等遊民」「露悪家」「月並み」等の言葉の文壇に行はれるやうになつたのは夏目先生から始まつてゐる。かう言ふ作家所生の言葉は夏目先

生以後にもない訣ではない。久米正雄君所生の「微苦笑」「強氣弱氣」などはその最たるものであらう。なほ又「等、等、等」と書いたりするのも宇野浩二君所生のものである。我我は常に意識して帽子を脱いでゐるものではない。のみならず時には意識的には敵とし、怪物とし、犬となすものにもいつか帽子を脱いでゐるものである。或作家を罵る文章の中にもその作家の作つた言葉の出るのは必ずしも偶然ではないかも知れない。

幼兒

我我は一體何の爲に幼い子供を愛するのか？ その理由の一半は少くとも幼い子供にだけは欺かれる心配のない爲である。

又

我我の恬然と我我の愚を公にすることを恥ぢないのは幼い子供に對する時か、——或は、犬猫に對する時だけである。

池大雅

「大雅は餘程呑氣な人で、世情に疎かつた事は、其室玉瀾を迎へた時に夫婦の交りを知らなかつたと云ふので略其人物が察せられる。」

「大雅が妻を迎へて夫婦の道を知らなかつたと云ふ様な話も、人間離れがしてゐて面白いと云へば、面白いと云へるが、丸で常識のない愚かな事だと云へば、さうも云へるだらう。」

かう言ふ傳説を信ずる人はここに引いた文章の示すやうに今日もまだ藝術家や美術史家の間に残つてゐる。大雅は玉瀾を娶つた時に交合のことは行はなかつたかも知れない。しかしその故に交合のことを知らずにあつたと信ずるならば、——勿論その人はその人自身烈しい性欲を持つてゐる餘り、苟くもちやんと知つてゐる以上、行はずにすませられる筈はないと確信してゐる爲であらう。

荻生徂徠

荻生徂徠は煎り豆を嚙んで古人を罵るのを快としてゐる。わたしは彼の煎り豆を嚙んだのは儉約の爲と信じてゐたものの、彼の古人を罵つたのは何の爲か一向わからなかつた。しかし今日考へて見れば、それは今人を罵るより

も確かに當り障りのなかつた爲である。

作家

文を作るのに缺くべからざるものは何よりも創作的情熱である。その又創作的情熱を燃え立たせるのに缺くべからざるものは何よりも或程度の健康である。瑞典式體操、菜食主義、複方ヂアスタアゼ等を輕んずるのは文を作らんとするものの志ではない。

又

文を作らんとするものは如何なる都會人であるにしても、その魂の奥底には野蠻人を一人持つてゐなければならぬ。

又

文を作らんとするものの彼自身を恥づるのは罪惡である。彼自身を恥づる心の上には如何なる獨創の芽も生へたことはない。

又

百足 ちつとは足でも歩いて見ろ。

蝶 ふん、ちつとは羽根でも飛んで見ろ。

又

氣韻は作家の後頭部である。作家自身には見えるものではない。若し又無

理に見ようとするれば、頸の骨を折るのに了るだけであらう。

又

批評家 君は勤め人の生活しか書けないね？
作家 誰か何でも書けた人がゐたかね？

又

あらゆる古來の天才は、我我凡人の手のとどかない壁上の釘に帽子を付けてゐる。尤も踏み臺はなかつた訣ではない。

又

しかしああ言ふ踏み臺だけはどこの古道具屋にも轉がつてゐる。

又

あらゆる作家は一面には指物師の面目を具へてゐる。が、それは恥辱ではない。あらゆる指物師も一面には作家の面目を具へてゐる。

又

のみならず又あらゆる作家は一面には店を開いてゐる。何、わたしは作品は賣らない？ それは君、買ひ手のない時にはね。或は賣らずとも好い時にはね。

又

俳優や歌手の幸福は彼等の作品ののこらぬことである。——と思ふこともない訣ではない。

辯護

他人を辯護するよりも自己を辯護するのは困難である。疑ふものは辯護士を見よ。

女人

健全なる理性は命令してゐる。——「爾、女人を近づくる勿れ。」

しかし健全なる本能は全然反對に命令してゐる。——「爾、女人を避くる勿れ。」

又

女人は我我男子には正に人生そのものである。即ち諸惡の根源である。

理性

わたしはヴォルテールを輕蔑してゐる。若し理性に終始するとすれば、我我は我我的存在に滿腔の呪咀を加へなければならぬ。しかし世界の賞讚に酔つた Candid の作者の幸福さは！

自然

我我の自然を愛する所以は、——少くともその所以の一つは自然は我我人間のやうに妬んだり欺いたりしないからである。

處世術

最も賢い處世術は社會的因襲を輕蔑しながら、しかも社會的因襲と矛盾せぬ生活をする事である。

女人崇拜

「永遠に女性なるもの」を崇拜したゲエテは確かに仕合せものの一人だつ

た。が、Yahooの牝を輕蔑したスウィフトは狂死せずにはゐなかつたのである。これは女性の呪ひであらうか？ 或は又理性の呪ひであらうか？

理性

理性のわたしに教へたものは畢竟理性の無力だつた。

運命

運命は偶然よりも必然である。「運命は性格の中にある」と云ふ言葉は決して等閑に生まれたものではない。

教授

若し醫家の用語を借りれば、苟くも文藝を講ずるには臨床的でなければならぬ筈である。しかも彼等は未だ嘗て人生の脈搏に觸れたことはない。殊に彼等の或るものは英佛の文藝には通じても彼等を生んだ祖國の文藝には通じてゐないと稱してゐる。

知徳合一

我我は我我自身さへ知らない。況や我我の知つたことを行に移すのは困難である。「知慧と運命」を書いたメエテルリンクも知慧や運命を知らなかつた。

藝術

最も困難な藝術は自由に人生を送ることである。尤も「自由に」と云ふ意

味は必ずしも厚顔にと云ふ意味ではない。

自由思想家

自由思想家の弱點は自由思想家であることである。彼は到底狂信者のやうに擥猛に戦ふことは出来ない。

宿命

宿命は後悔の子かも知れない。——或は後悔は宿命の子かも知れない。

彼の幸福

彼の幸福は彼自身の教養のないことに存してゐる。同時に又彼の不幸も、

——ああ、何と云ふ退屈さ加減！

小説家

最も善い小説家は「世故に通じた詩人」である。

言葉

あらゆる言葉は錢のやうに必ず両面を具へてゐる。例へば「敏感な」と云ふ言葉の一面は畢竟「臆病な」と云ふことに過ぎない。

或物質主義者の信条

「わたしは神を信じてゐない。しかし神経を信じてゐる。」

阿呆

阿呆はいつも彼以外の人人を悉く阿呆と考へてゐる。

處世的才能

何と言つても「憎惡する」ことは處世的才能の一つである。

懺悔

古人は神の前に懺悔した。今人は社會の前に懺悔してゐる。すると阿呆や悪黨を除けば、何びとも何かに懺悔せずには娑婆苦に堪へることは出来ないのかも知れない。

又

しかしどちらの懺悔にしても、どの位信用出来るかと云ふことはおのづから又別問題である。

「新生」讀後

果して「新生」はあつたであらうか？

トルストイ

ビュルコフのトルストイ傳を読めば、トルストイの「わが懺悔」や「わが宗教」の謠だつたことは明らかである。しかしこの謠を話しつづけたトルストイの心ほど傷ましいものはない。彼の謠は余人の眞實よりもはるかに紅血

を滴らしてゐる。

二つの悲劇

ストリントベリイの生涯の悲劇は「觀覽隨意」だつた悲劇である。が、トルストイの生涯の悲劇は不幸にも「觀覽隨意」ではなかつた。従つて後者は前者よりも一層悲劇的に終つたのである。

ストリントベリイ

彼は何でも知つてゐた。しかも彼の知つてゐたことを何でも無遠慮にさらけ出した。何でも無遠慮に、——いや、彼も亦我我のやうに多少の打算はしてゐたであらう。

又
ストリントベリイは「傳説」の中に死は苦痛か否かと云ふ實驗をしたことを語つてゐる。しかしかう云ふ實驗は遊戯的に出来るものではない。彼も亦「死にたいと思ひながら、しかも死ねなかつた」一人である。

或理想主義者

彼は彼自身の現實主義者であることに少しも疑惑を抱いたことはなかつた。しかしかう云ふ彼自身は畢竟理想化した彼自身だつた。

恐怖

我我に武器を執らしめるものはいつも敵に對する恐怖である。しかも屢實在しない架空の敵に對する恐怖である。

我我

我我は皆我我自身を恥ぢ、同時に又彼等を恐れてゐる。が、誰も卒直にかう云ふ事實を語るものはない。

戀愛

戀愛は唯性慾の詩的表現を受けたものである。少くとも詩的表現を受けない性慾は戀愛と呼ぶに價ひしない。

彼はさすがに老練家だつた。醜聞を起さぬ時でなければ、戀愛さへ滅多に
したことはない。

或老練家

自殺

萬人に共通した唯一の感情は死に對する恐怖である。道徳的に自殺の不評
判であるのは必ずしも偶然ではないかも知れない。

又

自殺に對するモンテエヌの辯護は幾多の眞理を含んでゐる。自殺しない

ものはないのではない。自殺することの出来ないものである。

又

死にたければいつでも死ねるからね。

ではためしにやつて見給へ。

革命

革命の上に革命を加へよ。然らば我等は今日よりも合理的に娑婆苦を嘗む
ることを得べし。

死

マイレンデルは頗る正確に死の魅力を記述してゐる。實際我我は何かの拍子に死の魅力を感じたが最後、容易にその圏外に逃れることは出来ない。のみならず同心圓をめぐるやうにちりちり死の前へ歩み寄るのである。

「いろは」短歌

我我の生活に缺くべからざる思想は或は「いろは」短歌に盡きてゐるかも知れない。

運命

遺傳・境遇、偶然、——我我の運命を司るものは畢竟この三者である。自ら喜ぶものは喜んで善い。しかし他を云々するのは僭越である。

嘲けるもの

他を嘲るものは同時に又他に嘲られることを恐れるものである。

或日本人の言葉

我にスウィツルを與へよ。然らずんば言論の自由を與へよ。

人間的な 餘りに人間的な

人間的な、餘りに人間的なものは大抵は確かに動物的である。

或才子

彼は悪黨になることは出来ても、阿呆になることは出来ないと思じてゐた。が、何年かたつて見ると、少しも悪黨になれなかつたばかりか、いつも唯阿呆に終始してゐた。

希臘人

復讐の神をジュピターの上に置いた希臘人よ。君たちは何も彼も知り悉してゐた。

又

しかしこれは同時に又如何に我我人間の進歩の遅いかと云ふことを示すものである。

聖書

一人の知慧は民族の知慧に若かない。唯もう少し簡潔であれば、……

或孝行者

彼は彼の母に孝行した、勿論愛撫や接吻が未亡人だつた彼の母を性的に慰めるのを承知しながら。

或惡魔主義者

彼は悪魔主義の詩人だった。が、勿論實生活の上では安全地帯の外に出ることはたつた一度だけで懲り懲りしてしまつた。

或自殺者

彼は或瑣末なことの爲に自殺しようと決心した。が、その位のことの爲に自殺するのは彼の自尊心には痛手だった。彼はピストルを手にしたまま、傲然とかう獨り語を言つた。——「ナポレオンでも蚤に食はれた時は痒いと思つたのに違ひないのだ。」

或左傾主義者

彼は最左翼の更に左翼に位してゐた。従つて最左翼をも輕蔑してゐた。

無意識

我我の性格上の特色は、——少くとも最も著しい特色は我我の意識を超越してゐる。

矜誇

我我の最も誇りたいのは我我の持つてゐないものだけである。實例。——
Tは獨逸語に堪能だった。が、彼の机上にあるのはいつも英語の本ばかりだった。

偶像

何びとも偶像を破壊することに異存を持つてゐるものはない。同時に又彼自身を偶像にすることに異存を持つてゐるものもない。

又

しかし又泰然と偶像になり了せることは何びとも出来ることではない。勿論天運を除外例としても。

天國の民

天國の民は何よりも先に胃袋や生殖器を持つてゐない筈である。

或仕合せ者

彼は誰よりも單純だつた。

自己嫌惡

最も著しい自己嫌惡の徴候はあらゆるものに謔を見つけることである。いや、必ずしもそればかりではない。その又謔を見つけることに少しも満足を感じないことである。

外見

由來最大の臆病者ほど最大の勇者に見えるものはない。

人間的な

我我人間の特色は神の決して犯さない過失を犯すと云ふことである。

罰

罰せられぬことほど苦しい罰はない。それも決して罰せられぬと神々でも保証すれば別問題である。

罪

道徳的並びに法律的範圍に於ける冒險的行爲、——罪は畢竟かう云ふことである。従つて又どう云ふ罪も傳奇的色彩を帯びないことはない。

わたし

わたしは良心を持つてゐない。わたしの持つてゐるのは神経ばかりである。

又

わたしは度たび他人のことを「死ねば善い」と思つたものである。しかもその又他人の中には肉親さへ交つてゐなかつたことはない。

又

わたしは度たびかう思つた。——「俺があつた女に惚れた時にあつた女も俺に惚れた通り、俺があつた女を嫌ひになつた時にはあつた女も俺を嫌ひになれば善いのに。」

わたしは三十歳を越した後、いつでも戀愛を感じるが早いか、一生懸命に抒情詩を作り、深入りしない前に脱却した。しかしこれは必しも道德的にわたしの進歩したのではない。唯ちよつと肚の中に算盤をとることを覺えたからである。

又

又

わたしはどんなに愛してゐた女とでも一時間以上話してゐるのは退窟だつた。

わたしは度たび嘘をついた。が、文字にする時は兎に角、わたしの口ずから話した嘘はいづれも拙劣を極めたものだつた。

又

又

わたしは第三者と一人の女を共有することに不平を持たない。しかし第三者が幸か不幸かかう云ふ事實を知らずにゐる時、何か急にその女に憎惡を感じるのを常としてゐる。

又

わたしは第三者と一人の女を共有することに不平を持たない。しかしそれは第三者と全然見ず知らずの間からであるか、或は極く疎遠の間からであるか、どちらかであることを条件としてゐる。

又

わたしは第三者を愛する爲に夫の目を偷んでゐる女にはやはり戀愛を感じないことはない。しかし第三者を愛する爲に子供を顧みない女には満身の憎悪を感じてゐる。

又

わたしを感傷的にするものは唯無邪氣な子供だけである。

又

わたしは三十にならぬ前に或女を愛してゐた。その女は或時わたしに言つた。——「あなたの奥さんにすまない。」わたしは格別わたしの妻に濟まないと思つてゐた訣ではなかつた。が、妙にこの言葉はわたしの心に滲み渡つた。わたしは正直にかう思つた。——「或はこの女にもすまないのかも知れない。」わたしは未だにこの女にだけは優しい心もちを感じてゐる。

又

わたしは金錢には冷淡だつた。勿論食ふだけには困らなかつたから。

わたしは両親には孝行だった。両親はいづれも年をとつてゐたから。

又

わたしは二三の友だちにはたとひ眞實を言はないにもせよ、謔をついたことは一度もなかつた。彼等も亦謔をつかなかつたから。

人生

革命に革命を重ねたとしても、我我人間の生活は「選ばれたる少数」を除きさへすれば、いつも暗澹としてゐる筈である。しかも「選ばれたる少数」と

は「阿呆と悪黨と」の異名に過ぎない。

民衆

シエクスピアも、ゲエテも、李太白も、近松門左衛門も滅びるであらう。しかし藝術は民衆の中に必ず種子を残してゐる。わたしは大正十二年に「たとひ玉は碎けても、瓦は碎けない」と云ふことを書いた。この確信は今日でも未だに少しも揺がすにゐる。

又

打ち下ろすハンマアのリズムを聞け。あのリズムの存する限り、藝術は永遠に滅びないであらう。

(昭和政元の第一日)

又

わたしは勿論失敗だった。が、わたしを造り出したものは必ず又誰かを作り出すであらう。一本の木の枯れることは極めて區々たる問題に過ぎない。無数の種子を宿してゐる、大きい地面が存在する限りは。(同上)

或夜の感想

眠りは死よりも愉快である。少くとも容易には違ひあるまい。

(昭和改元の第二日)

澄江堂雜記

一 夏目先生の書

僕にも時々夏目先生の書を鑑定してくれろと言ふ人がある。が、僕の眼光ではどうも判然とは鑑定出来ない。唯まつ赤な贋せものだけはおのづから正體を現はしてくれる。僕は近頃その贋せものの中に決して贋せものとは思はれぬ一本の扇に遭遇した。成程この扇に書いてある句は漱石と言ふ名はついてゐても、確かに夏目先生の書いたものではない。しかし又句がらや書體から見れば、夏目先生の贋せものを作る爲に書いたのではないことも確かである。この漱石とは何ものであらうか？ 太白堂三世村田桃鄰も始めの名はやはり漱石である。けれども僕の見た扇はさほど古いものとも思はれない。僕はこの贋せものならざるに贋せものと呼ばれる扇の筆者を如何にも氣の毒に

思つてゐる。因に言ふ、夏目先生の書にも近年はめつきり贋せものが殖えたりらしい。(大正十四年十月二十日)

二 霜の來る前

毎日庭を眺めてゐると、苔の最も美しいのは霜の來る前、——まづ十月一ぱいである。それから霜の來る前に「カナメモチ」や「モッコク」などの赤々と芽をふいてゐるのは美しいよりも寧ろもの哀れでならぬ。(同年十一月十日)

三 澄江堂

僕になせ澄江堂などと號するかと尋ねる人がある。なせと言ふほどの因縁はない。唯いつか漫然と澄江堂と號してしまつたのである。いつか佐佐木茂

索君は「スミエと言ふ藝者に惚れたんですか？」と言つた。が、勿論そんな訣でもない。僕は時々本名の外に入らざる名などをつけることはよせば好かつたと思つてゐる。(十一月十二日)

四 雅 號

しかし雅號と言ふものはやはり作品と同じやうにその人の個性を示すものである。菱田春草は年少時代には駿走の號を用ひてゐた。年少時代の春草は定めし駿走らしかつたであらう。さう言へば正宗白鳥氏も昔は白塚と號してゐたかと思ふ。これは僕の記憶違ひかも知れない。が、若し違つてゐないとすれば、この號も兎に角年少時代の正宗氏を想はせるのに足るものであらう。僕は昔の文人たちの雅號を幾つも持つてゐたのは必ずしも道樂に拵へたので

はない。彼等の趣味の進歩に應じておのづから出来たものと思つてゐる。
(同前)

五 シルレルの頭蓋骨

シルレルの遺骸は彼の歿年、——千八百五年以來、ちやんとワイマールの大公爵家の靈廟の中に收められてゐた。が、二十年ばかりたつた後、その靈廟を再建する際に頭蓋骨だけゲエテに贈ることになつた。ゲエテは彼の机の上はこの舊友の頭蓋骨を置き、「シルレル」と題する詩を作つた。そればかりではない。エエベルラインなどは御苦勞にも「シルレルの頭蓋骨を見守れるゲエテ」とか何とか言ふ半身像を作つた。けれどもこれはシルレルではない、誰か他の人の頭蓋骨だつた。(ほんたうのシルレルの頭蓋骨はやつと近年テユ

ウビンゲンの解剖學の教授に發見された。僕はかう言ふ話を読み、惡魔のいたづらを見たやうに感じた。他人の頭蓋骨に感激したゲエテは勿論滑稽に見えるであらう。しかしその頭蓋骨がなかつたとしたらば、ゲエテ詩集は少くとも「シルレル」の一篇を缺いてゐたのである。(十一月二十日)

六 美人禍

ゲエテをワイマアルの宮廷から退かせたのはフォン・ハイゲンドルフ夫人である。しかも又シヨオベンハウエルに一世一代の戀歌を作らせたのもやはりこのフォン・ハイゲンドルフ夫人である。前者に反感を抱いた女性は彼女の外になかつたらしい。後者に好感を與へたのは勿論彼女一人である。兎に角兩天才を惱ませただけでも、ただの女ではなかつたのであらう。現に寫眞

に徴すると、目の大きい、鼻の尖つた、如何にも一癖ありげな美人である。(二十一日)

七 放心

僕は教師をしてゐた頃、ネクタイをするのを忘れたまま、澄まして往來を歩いてゐた。それを幸ひにも見つけてくれたのは當年の菅忠雄君である。しかしその後學校へ行つたら、今度は物理の教官が一人、カラアをつけるのを忘れたと見え、ネクタイだけシャツにぶら下げてゐた。どちらがはた目には可笑しかつたかしら。(二十二日)

八 同上

僕は菊池と長崎へ行つた時、汽車中大いに文藝論をした。そのうちにふと気がついて見ると、菊池はいつか両手の間にバラソルを一本まはしてゐる。僕は勿論「おい、君」と言つた。すると菊池は苦笑しながら、鄰にゐた奥さんにバラソルを返した。僕は早速文藝論の代りに菊池の放心を攻撃した。菊池の降参したのはこの時だけである。が、長崎を立つ段になると、僕自身うつかり上野屋へ雨外套を忘れて來てしまつた。菊池の嬉しがるまいことか、忌々しくも大笑ひをして曰、「君も亦細心は誇れないね。」(同上)

病中雜記

一 毎年一二月の間になれば、胃を損じ、腸を害し、更に神経性狭心症に罹り、鬱々として日を暮らすこと多し。今年も亦その例に洩れず。ぼんやり置炬燵に當りをれば、氣違ひになる前の心もちはかかるものかときへ思ふことあり。

二 僕の神経衰弱の最も甚しかりしは大正十年の年末なり。その時には眠りに入らんとすれば、忽ち誰かに名前を呼ばるる心ちし、飛び起きたることも少なからず。又古き活動寫眞を見る如く、黄色き光の斷片目の前に現れ、「おや」と思ひしことも度たびあり。十一年の正月、ふと僕に會ひて「死相がある」と言ひし人ありしが、まことにそんな顔をしてをりしなるべし。

三 「墨汁一滴」や「病牀六尺」に「腦病を病み」云々とあるは神経衰弱のことなるべし。僕は少時正岡子規は腦病などに罹りながら、なせ俳句が作れたかと不思議に思ひし覚えあり。「昔を今になすよしもがな」とはいにしへ人の歎きのみにあらず。

四 月餘の不眠症の爲に〇・七五のアダリンを常用しつゝ、枕上子規全集第五巻を読めば、俳人子規や歌人子規の外に批評家子規にも敬服すること多し。「歌よみに與ふる書」の論鋒破竹の如きは言ふを待たず。小説戯曲等を論ずるも、今なほ僕等に適切なるものあり。こは獨り僕のみならず、佐藤春夫も亦力説する所。

五 子規自身の小説には殆ど見るに足るものなし。然れども子規を長生せしめ、更に小説を作らしめん乎、伊藤左千夫、長塚節等の諸家の下風に立つものにあらず。「墨汁一滴」や「病牀六尺」中に好箇の小品少なからざるは既に人の知る所なるべし。就中「病牀六尺」中の小提灯の小品の如きは何度讀み返しても飽かざる心ちす。

六 人としての子規を見るも、病苦に面して生悟りを銜はず、歎聲を發したり、自殺したがつたりせるは當時の星董詩人よりも數等近代人たるに近かるべし。その中江兆民の「一年有半」を評せる言の如き、今日これを見るも新たなるものあり。

七 然れども子規の生活力の横溢せるには驚くべし。子規はその生涯の大半を病牀に暮らしたるにも關らず、新俳句を作り、新短歌を詠じ、更に又寫生文の一道をも拓けり。しかもなほ力の窮まるを知らず、女子教育の必要を論じ、日本服の美的價值を論じ、内務省の牛乳取締令を論ず。殆ど病人とは思はれざるの看あり。尤も當時のカリエス患者は既に腦病にはあらざりしなるべし。(二月九日)

八 何ゆゑに文語を用ふる乎と皮肉にも僕に問ふ人あり。僕の文語を用ふるは何も氣取らんが爲にあらず。唯口語を用ふるよりも數等手數のかからざるが爲なり。こは恐らくは僕の受けたる舊式教育の崇りなるべし。僕は十年來口語文を作り、一日十枚を越えたることは(一枚二十行二十字詰め)僅か

に二三度を數ふるのみ。然れども文語文を作らしめば、一日二十枚なるも難しとせず。「病中雜記」の文語文なるも僕にありてはやむを得ざるなり。

九 僕の體は元來甚だ丈夫ならざれども、殊にこの三四年來は一層脆弱に傾けるが如し。その原因の一つは明らかに卷煙草を無暗に吸ふことなり。僕の自治寮にありし頃、同室の藤野滋君、屢僕を嘲つて曰、「君は文科にゐる癖に卷煙草の味も知らないんですか？」と。僕は今や卷煙草の味を知り過ぎ、反つて斷煙を實行せんとす。當年の藤野君をして見せしめば、僕の進歩の長足なるに多少の敬意なき能はざるべし。因に云ふ、藤野滋君はかの夭折したる明治の俳人藤野古白の弟なり。

十 第一の手紙に曰、「社會主義を捨てん乎、父に叛かん乎、どうしたものでせう？」更に第二の手紙に曰、「原稿至急願上げ候。」而して第三の手紙に曰、「あなたの名前を拜借して×××氏を攻撃しました。僕等無名作家の名前では効果がないと思ひましたからどうか悪しからず。」第三の手紙を書ける人はどこの誰ともわからざる人なり。僕はかかる手紙を讀みつつ、日々腹ぐすり「げんのしやうこ」を飲み、靜かに生を養はんと欲す。不眠症の癒えざるも當然なるべし。

十一 僕は昨夜の夢に古道具屋に入り、青貝を嵌めたる硯箱を見る。古道具屋の主人曰、「これは安土の城にあつたものです」僕曰、「蓋の裏に何か横文字があるね。」主人曰、「これはデキタミンと云ふ字です。」安土の城などの現は

れしは「安土の春」を読みし爲なるべし。こは寧ろ滑稽なれど、夢中にも薬の名の出づるは多少のはかなさを感せざる能はず。

十二 僕の日課の一つは散歩なり。藤木川の岸を徘徊すれば、孟宗は黄に、梅花は白く、春風殆ど面を吹くが如し。偶路傍の大石に一匹の蠅のとまれるあり。我家の庭に蠅を見るは毎年五月初旬なるを思ひ、茫然とこの蠅を見守ること多時。僕の病體、五月に至らば果して舊に復するや否や。

追憶

一 埃

僕の記憶の始まりは數へ年の四つの時のことである。と言つても大した記憶ではない。唯廣さんと言ふ大工が一人、梯子か何かに乗つたまま玄能で天井を叩いてゐる、天井からばつばつと埃が出る——そんな光景を覚えてゐるのである。

これは江戸の昔から祖父や父の住んでゐた古家を毀した時のことである。僕は數へ年の四つの秋、新しい家に住むやうになつた。従つて古家を毀したのは遅くもその年の春だつたであらう。

二 位牌

僕の家のお佛壇には祖父母の位牌や叔父の位牌の前に大きい位牌が一つあつた。それは天保何年に歿した曾祖父母の位牌だつた。僕はもの心のついた時から、この金箔の黒んだ位牌に恐怖に近いものを感じてゐた。

僕の後聞いた所によれば、曾祖父は奥坊主を勤めてゐたものの、二人の娘を二人とも花魁に賣つたと言ふ人だつた。のみならず又曾祖母も曾祖父の夜泊りを重ねる爲に家に焚きものない時には鉈で椽側を叩き壊し、それを薪にしたと言ふ人だつた。

三 庭木

新らしい僕の家のお庭には冬青、榎、木柵、かくれみの、臘梅、八つ手、五葉の松などが植わつてゐた。僕はそれ等の木の中でも特に一本の臘梅を愛し

た。が、五葉の松だけは何か無氣味でならなかつた。

四 「てつ」

僕の家には子守りの外に「てつ」と云ふ女中が一人あつた。この女中は後に「源さん」と言ふ大工のお上さんになつた爲に「源てつ」と言ふ渾名を貰つたものである。

何でも一月か二月の或夜、(僕は數へ年の五つだつた。)地震の爲に目をさました「てつ」は前後の分別を失つたと見え、枕もとの行燈をぶら下げたなり、茶の間から座敷を走りまはつた。僕はその時座敷の畳に油じみの出來たのを覺えてゐる。それから又夜中の庭に雪の積もつてゐたのを覺えてゐる。

五 夢中遊行

僕はその頃も今のやうに體の弱い子供だつた。殊に便秘しさへすれば、必ずひきつける子供だつた。僕の記憶に残つてゐるのは僕が最後にひきつけた九歳の時のことである。僕は熱もあつたから、床の中に横たはつたまま、伯母の髪を結ふのを眺めてゐた。そのうちにいつかひきつけたと見え、寂しい海邊を歩いてゐた。その又海邊には人間よりも化物に近い女が一人、腰巻き一つになつたなり、身投げをする爲に合掌してゐた。それは「妙々車」と云ふ草双紙の中の挿畫だつたらしい。この夢うつつの中の景色だけは未だにはつきりと覺えてゐる。正氣になつた時のことは覺えてゐない。

六 「つうや」

僕が一番親しんだのは「てつ」の後にゐた「つる」である。僕の家はその頃から経済状態が悪くなつたと見え、女中もこの「つる」一人ぎりだつた。僕は「つる」のことを「つうや」と呼んだ。「つうや」は當り前の女よりもロマンティック趣味に富んでゐたのであらう。僕の母の話によれば、法界節が二三人編笠をかぶつて通るのを見ても「敵討ちでせうか？」と尋ねたさうである。

七 郵便箱

僕の家の方には郵便箱が一つとりつけてあつた。母や伯母は日の暮に

なると、代る代る門の側へ行き、この小さい郵便箱の口から往來の人通りを眺めたものである。封建時代らしい女の氣もちは明治三十二三年頃にもまだかすかに残つてゐたであらう。僕は又かう云ふ時に「さあ、もう雀色すいめいろとき時になつたから」と母の言つたのを覚えてゐる。雀色時と云ふ言葉はその頃の僕にも好きな言葉だつた。

八 炙

僕は何かいたづらをする時、必ず伯母につかまつては足の小指に炙をすえられた。僕に最も怖ろしかつたのは炙の熱さそれ自身よりも炙をすえられると云ふことである。僕は手足をばたばたさせながら「かちかち山だよう。ぼうぼう山だよう」と怒鳴つたりした。これは勿論火がつく所から自然と聯想

を生じたのであらう。

九 剝製の雉

僕の家へ来る人々の中に「お市さん」と云ふ人があつた。これは代地かどこかにゐた柳派の「五りん」のお上さんだつた。僕はこの「お市さん」にいろいろの晝本や玩具などを貰つた。その中でも僕を喜ばせたのは大きい剝製の雉である。

僕は小學校を卒業する時、その尾羽根の切れかかつた雉を寄附して行つたやうに覺えてゐる。が、それは確かではない。唯未だに可笑しいのは雉の剝製を貰つた時、父が僕に言つた言葉である。

「昔、うちの隣にゐた××××（この名前は覺えてゐない）と云ふ人は丁度

元日のしらしら明けの空を白い鳳凰がたつた一羽、中津の方へ飛んで行くのを見たことがあると言つてゐたよ。尤も出たらめを云ふ人だつたがね。」

十 幽靈

僕は小學校へはひつてゐた頃、どこの長唄の女師匠は亭主の怨靈にとりつかれてゐるとか、ここの仕事師のお婆さんは嫁の幽靈に責められてゐるとか、いろいろの怪談を聞かせられた。それを又僕に聞かせたのは僕の祖父の代に女中をしてゐた「おてつさん」と云ふ婆さんである。僕はそんな話のためか、夢とも現ともつかぬ境にいろいろの幽靈に襲はれ勝ちだつた。しかもそれ等の幽靈は大抵はおてつさんの顔をしてゐた。

十一 馬車

僕が小學校へはひらぬ前、小さい馬車を驢馬に牽かせ、その又馬車に子供を乗せて、町内をまはる爺さんがあつた。僕はこの小さい馬車に乗つて、お竹倉や何かを通りたかつた。しかし僕の守りをした「つうや」はなせかそれを許さなかつた。或は僕だけ馬車へ乗せるのを危険にでも思つた爲めかも知れない。けれども青い幌を張つた、玩具よりも僅かに大きい馬車が小刻みにことごと歩いてゐるのは幼な目にもハイカラに見えたものである。

十二 水屋

その頃はまだ本所も井戸の水を使つてゐた。が、特に飲用水だけは水屋の

水を使つてゐた。僕は未だに目に見えるやうに、顔の赤い水屋の爺さんが水桶の水を水甕の中へぶちまける姿を覚えてゐる。さう言へばこの「水屋さん」も夢現の境に現はれて来る幽霊の中の一人だつた。

十三 幼稚園

僕は幼稚園へ通ひ出した。幼稚園は名高い回向院の隣の江東小學校の附屬である。この幼稚園の庭の隅には大きい銀杏が一本あつた。僕はいつもその落葉を拾ひ、本の中に挟んだのを覚えてゐる。それから又或圓顔の女生徒を好きになつたのも覚えてゐる。唯如何にも不思議なのは今になつて考へて見ると、なせ彼女を好きになつたか、僕自身にもはつきりしない。しかしその人の顔や名前は未だに記憶に残つてゐる。僕はつひ去年の秋、幼稚園時代の

友だちに遇ひ、その頃のことを話し合つた末、「先方でも覚えてゐるかしら」と言つた。

「そりや覚えてゐないだらう。」

僕はこの言葉を聞いた時、かすかに寂しい心もちがした。その人は少女に似合はない、萩や芒に露の玉を散らした、袖の長い着物を着てゐたものである。

十四 相撲

相撲も亦土地がらだけに大勢近所に住まつてゐた。現に僕の家裏の向うは年寄りの峯岸の家だつたものである。僕の小学校にゐた時代は丁度常陸山や梅ヶ谷の全盛を極めた時代だつた。僕は荒岩龜之助が常陸山を破つた爲め、

大評判になつたのを覚えてゐる。一體ひとり荒岩に限らず、國見山でも逆鉦でもどこか錦繪の相撲に近い、男ぶりの人に優れた相撲は悉く僕の最辰だつた。併し相撲と云ふものは何か僕には漠然とした反感に近いものを與へ易かつた。それは僕が人並みよりも體の弱かつた爲かも知れない。又平生見かける相撲が——髪を藁束ねにした禪かつぎが相撲膏を貼つてゐた爲かも知れない。

十五 宇治紫山

僕の一家は宇治紫山と云ふ人に一中節を習つてゐた。この人は酒だの遊藝だのにお藏前の札差しの身上をすつかり費してしまつたらしい。僕はこの「お師匠さん」の酒の上の悪かつたのを覚えてゐる。又小さい借家にゐても、

二三坪の庭に植木屋を入れ、冬などは實を持つた青木の下に枯松葉を敷かせたのを覚えてゐる。

この「お師匠さん」は長命だった。何でも晩年味噌を買ひに行き、雪上りの往來で轉んだ時にも、やつと家へ歸つて來ると、「それでもまあ禪だけ新しくつて好かつた」と言つたさうである。

十六 學問

僕は小學校へはひつた時から、この「お師匠さん」の一人息子に英語と漢文と習字とを習つた。が、どれも進歩しなかつた。唯英語はTやDの發音を覺えた位である。それでも僕は夜になると、ナショナル・リイダアや日本外史をかかへ、せつせと相生町二丁目の「お師匠さん」の家へ通つて行つた。こ

is a dog —— ナショナル・リイダアの最初の一行は多分かう云ふ文章だったであらう。しかしそれよりはつきりと僕の記憶に残つてゐるのは、何かの拍子に「お師匠さん」の言つた「誰とかさんもこの頃ちや身なりが山水さんすいだと云ふ言葉である。

十七 活動寫眞

僕が始めて活動寫眞を見たのは五つか六つの時だつたであらう。僕は確か父と一しよにさう云ふ珍しいものを見物しに大川端の二洲樓へ行つた。活動寫眞は今のやうに大きい幕に映るのではない。少くとも畫面の大きさはやつと六尺に四尺位である。それから寫眞の話も亦今のやうに複雑ではない。僕はその晩の寫眞の中に魚を釣つてゐた男が一人、大きい魚が針にかかつたた

め、水の中へまつ逆様にひき落される畫面を覚えてゐる。その男は何でも藁帽をかぶり、風立つた柳や芦を後ろに長い釣竿を手にしてゐた。僕は不思議にその男の顔がネルソンに近かつたやうな気がしてゐる。が、それはことによると、僕の記憶の間違ひかも知れない。

十八 川開き

やはりこの二州樓の棧敷に川開きを見てゐた時である。大川は勿論鬼灯提燈を吊つた無数の船に埋まつてゐた。するとその大川の上にとつと何かの雪崩^だれる音がした。僕のまはりにゐた客の中には龜清の棧敷が落ちたとか、中村樓の棧敷が落ちたとか、いろいろの噂が傳はり出した。しかし事實は木橋だつた兩國橋の欄干が折れ、大勢の人々の落ちた音だつた。僕は後にこの椿

事を幻燈か何かに映したのを見たこともあるやうに覚えてゐる。

十九 ダアク一座

僕は當時回向院の境内にいろいろの見世物を見たものである。風船乗り、大蛇、鬼の首、何とか云ふ西洋人が非常に高い桿の上からとんぼを切つて落ちて見せるもの、——敷へ立ててゐれば際は限はない。しかし一番面白かつたのはダアク一座の操り人形である。その中でも又面白かつたのは道化した西洋の無頼漢が二人、化けもの屋敷に泊る場面である。彼等の一人は相手の名前をいつもカリフラと稱してゐた。僕は未だに花キャベツを食ふ度に必ずこの「カリフラ」を思ひ出すのである。

十八 中洲

當時の中洲は言葉通り、芦の茂つたデルタアだつた。僕はその芦の中に流れ灌頂や馬の骨を見、氣味悪がつたことを覚えてゐる。それから小學校の先輩に「これはアシカヨシか？」と聞かれて當惑したことも覚えてゐる。

十九 壽座

本所の壽座が出来たのもやはりその頃のことだつた。僕は或日の暮れがた、或小學校の先輩と元町通りを眺めてゐた。すると亞鉛の海鼠板を積んだ荷車が何臺も通つて行つた。

「あれはどこへ行く？」

僕の先輩はかう言つた。が、僕はどこへ行くか見當も何もつかかなかつた。

「壽座！ ちやあの荷車に積んであるのは？」

僕は今度も勢ひ好く言つた。

「ブリツキ！」

しかしそれは徒らに先輩の冷笑を買ふだけだつた。

「ブリツキ？ あれはトタンと云ふものだ。」

僕はかう云ふ問答の爲め、妙に悄氣たことを覚えてゐる。その先輩は中學を出た後、忽ち肺を犯されて故人になつたとか云ふことだつた。

二十 いぢめつ子

幼稚園にはいつてゐた僕は殆ど誰にもいぢめられなかつた。尤も本間の徳